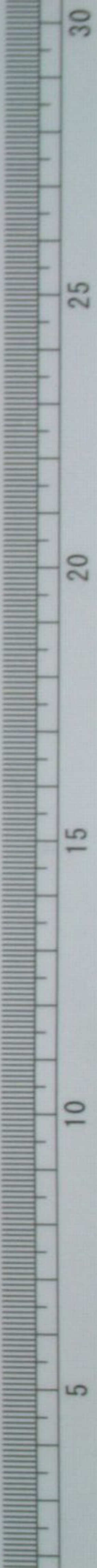


我樂多德

五

昭和十年七月下迄起筆

特別
44
1919
468



176733

我樂多誌

昭和十年七月下流起筆

○安島のくま川に流すの軍艦乗組員は涼しくつてよめると羨望の流が起ると、美の美人の舟に航するうきをんかよひまのといふ、日本の舟船の航本位ひるかよ、西洋のと異つてスベレたが、この部分極めを低く、構造さんておんそい、と意が少く、且の小さいか、船内、非常な暑いの、且の船内、何時航船が起る、切んまのと、緊張し、寸刻も油めを許さざるの、か、外に



風丹開剣 (色設) 筆鼎黄
 幀一第の中幀六全幅屏水山鼎黄
 本紙 分三寸一尺一圓・分七寸五尺一高
 (本館に収蔵資料(昭和十年七月) 昭和七年七月 東京美術学校)

ハ評判がよろしい。日本の都府のレケチをのけて、白毛
人種の紳会を第1と見えぬが、まんぢ面白白行がらいのを
どこやら、手を引とことうていある。

○トルストイの友誼が長年没却もあつた。原久一介
ハねむ口レヤのさう、情も心ゆゑあつたが、案の定さうさ
ロレヤは在武の外交を今もやつてあつた。例のスパイ政
策の巧み、金を喰ひし日本人と手入の人の
てあつたが、危険があつたところの、いんち執り氣
のつくの、往年、東田秋濤、露探と云ふん。自
分の極力、高潔利が自分の友人であつた。為百方を
の無実と見、疏したこともあつた。或は、魚の喰
はせん。此のつち、知るまゝの、金を世につた。こゝろを

たゞ

一 空を獲るはよく三つ

一 自らかゝる罪惡の流をよきと増大す

一 何れもよき自分をあつた人の何れもさし

しか自分より尊ぶと拂はる

一 浮山の室を有してゐる言ふは決して人を治

めまひ。九尺二間の葉葉小舎に家族が一杯

あつたや又切つて漂泊者が治

一 何一つ射止しつゝの者の雨をあつたるの雨を

にひとし

一 射の入つた鏡の鈍い音を出すか、まはと二三

割るはまゝに舟山流の音を出す

一 命者の流をいふ命者の流をよきと得る

一 地からかゝる鹽の物も本十年 川柳

一 恥かしの替へ三十のをかへ廻る

一 腹帯をしめると腹が生きてくる

一 貧しい人間の命は裕る人間の命よりあつた

て不安きと悲しい

一 思想上の病氣は肉體上の病氣より殺人

的なきしとよき 愚の各々を看す

一 愚人の愚者の傍に一生を過ごすより少くも

真実を得る得る、まゝの丁かスプーンが

スプーンの味を解し得るのと同じである。

一 単純な者か人の心を魅する兎も動物が

吾々の心を魅するに此故がある

一 尚書、無慈悲の人たるを得ざるの故を以てその
本来の慈悲心より自由を興へて見よ、彼は其所に
尚書たることを感ずるべからう。

○私が尚書に趣味をもち、いろいろの物を空を集めるの
如く、文具も多し、集めれば、此の部類に私か主
力を置いたる印章もある。印章も多し、多方面
の趣味を感ずる。本えを専ら、自雅の
無いと自考へた。勿論最初、佳材と佳刻と主
と一と漁つたが、往々名家の姓名雅部を刻し、
印の出遇ふことがある。他人の氏名を刻し、印を

ハ概して印材を流すに付、目的は、骨董を以て、
刻字、注名を拂ハ、玉砂印面を磨消し、また
物とす、其れを例とす、其れを鑄印とす、
金銀ハ溶解し、地金として、便かある、銅印も
便かある、刻字の如く、書えん、自かハ印を
集め、折、去、削、氏名印を齎し、来、り、書
遇し、或、時、つく、考へた。他人の氏名、印、使用
は、好く、其れが、せん、ば、と、考へ、磨り、つ、ぶ、す、へ、ま
る、へ、之、が、頼、山、陽、の、名、印、を、あ、つ、た、ら、う、と、考へ、ら、う。
新井白石の印、を、あ、つ、た、ら、う、と、考へ、ら、う、夜、令、使用、
は、好く、其れが、せん、ば、と、考へ、磨り、つ、ぶ、す、へ、ま
る、へ、之、が、頼、山、陽、の、名、印、を、あ、つ、た、ら、う、と、考へ、ら、う。
うと、個、快、を、感、し、と、考へ、誰、の、名、か、切、り、さ、す、後、者

此の磨り潰すも架中の置き餘るに其氏名も研究
すると考へる高名の人々の私印であることか
其の刻者が高名の人々の私印を集めるやうな
ものか。若くは人の私印の私印を集めるやうな
ものか。或るものを入るやうな相ある苦心し
た高名の人々の尾高三沙の養老印（銅章連
環鈕）や狩谷極高の私印一類と高名印の他人
と競うものも入るやうな事ありて事ある。又
此自分の考へる高名の人々の印や自分と御國を
同めするもの縁故ある人の印をとり分け自分
の趣味とせしめ池田福村に抱へて入るやうな事
ありて事ある。此の印や自分と御國を同めするもの縁故ある人の印をとり分け自分の趣味とせしめ池田福村に抱へて入るやうな事ありて事ある。

池田福村

此の磨り潰すも架中の置き餘るに其氏名も研究
すると考へる高名の人々の私印であることか
其の刻者が高名の人々の私印を集めるやうな
ものか。若くは人の私印の私印を集めるやうな
ものか。或るものを入るやうな相ある苦心し
た高名の人々の尾高三沙の養老印（銅章連
環鈕）や狩谷極高の私印一類と高名印の他人
と競うものも入るやうな事ありて事ある。又
此自分の考へる高名の人々の印や自分と御國を
同めするもの縁故ある人の印をとり分け自分
の趣味とせしめ池田福村に抱へて入るやうな事
ありて事ある。此の印や自分と御國を同めするもの縁故ある人の印をとり分け自分の趣味とせしめ池田福村に抱へて入るやうな事ありて事ある。

が啓見さん、春暉を楠南菰の印や、藤崎木井の父の
三時の印や、高屋自刻の印、中山信天の自刻の印と
とハ皆粗杖にあらが、コンナうのを活すのハ全く鉛板
の**かむり**、俗眼の能するをわらう。粗杖は古人の印
か多く存することを知つてから粗杖のをも漁つて歩
つたこともあらが、二十年はかり集めて得たもの數
百顆に及び、木ノ公や土方伯、言成成、中村山並、其松
泥舟等の近年の人々及んひある。其の**目録**ハ別紙掲
げから一と記さるゝのが、私が此の蒐集に感したること
をまゝと、名家の私印の宛から夫人の**位牌**の**御**
まゝの**び**、骨董界に名家の手澤のよめを介さ
る算出するが、名家の手澤をも**任**最も深甚に信

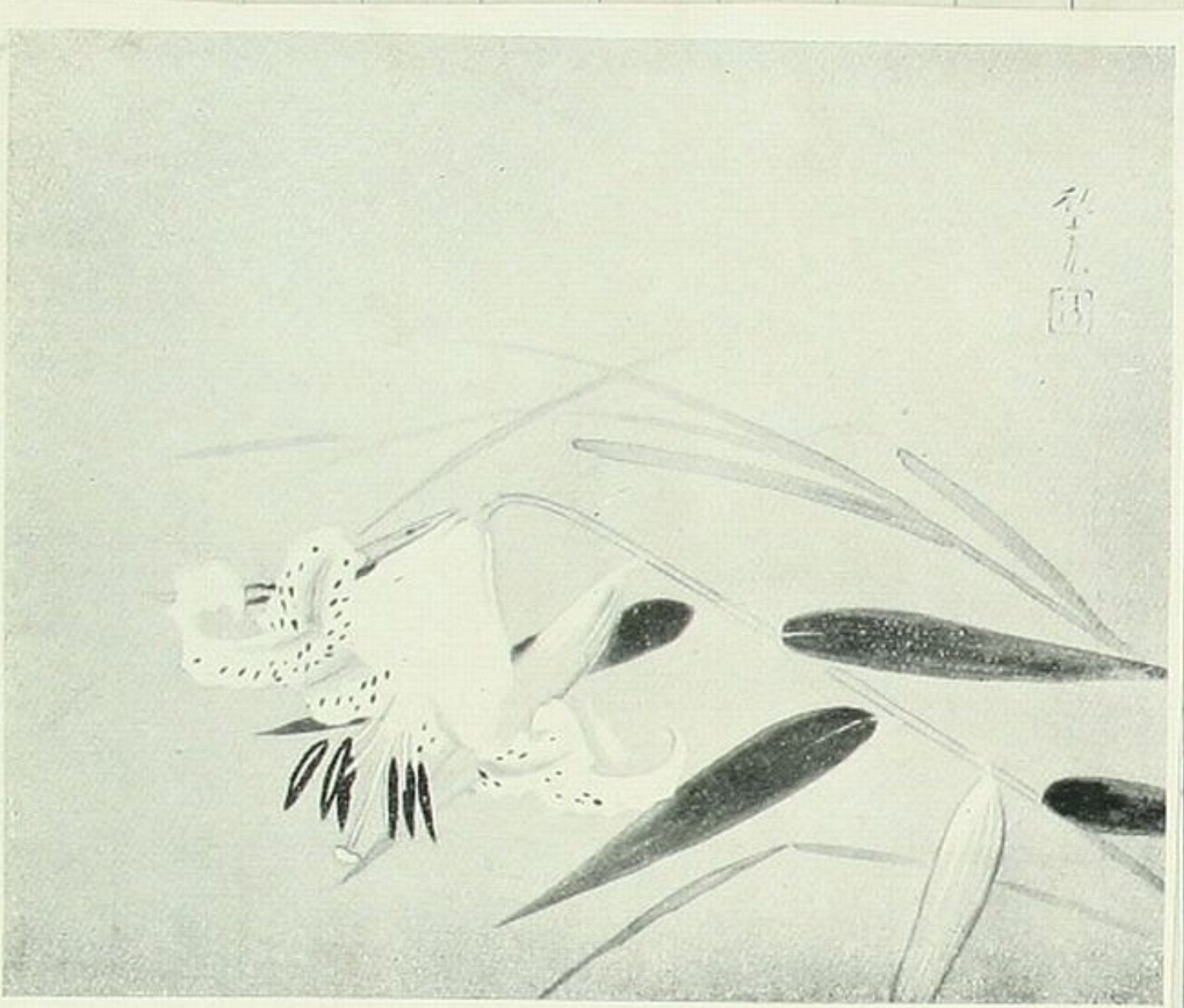
漢文

此の如きものハ夫人の私印に優るものハ無いであらう。
この物かその人の心ある、署名の下に押して其都
度夫人の**指紋**が紐に附着する作者の**魂魄**
ある印歟と存する。こと云へ得よう。昔ハ多
く人か死すと遺印を棺柩に入して埋められたりあ
つた。そんならいろいゝの意味あるが、夫人と離るる
たる關係があるから生前通う其身也、**愛**と**解**
して差支るるもの。夫人ハ尤も大切なるものか
のから、夫人**致**するもの、**指**入るものも、其の印面
を刀を削ぐものも、**再**使用せぬ用意から
こあつて、**廢**物に利用せざる用意あるもの。其を
二人の印章するハ其所持者の**命**が打こんだもの。

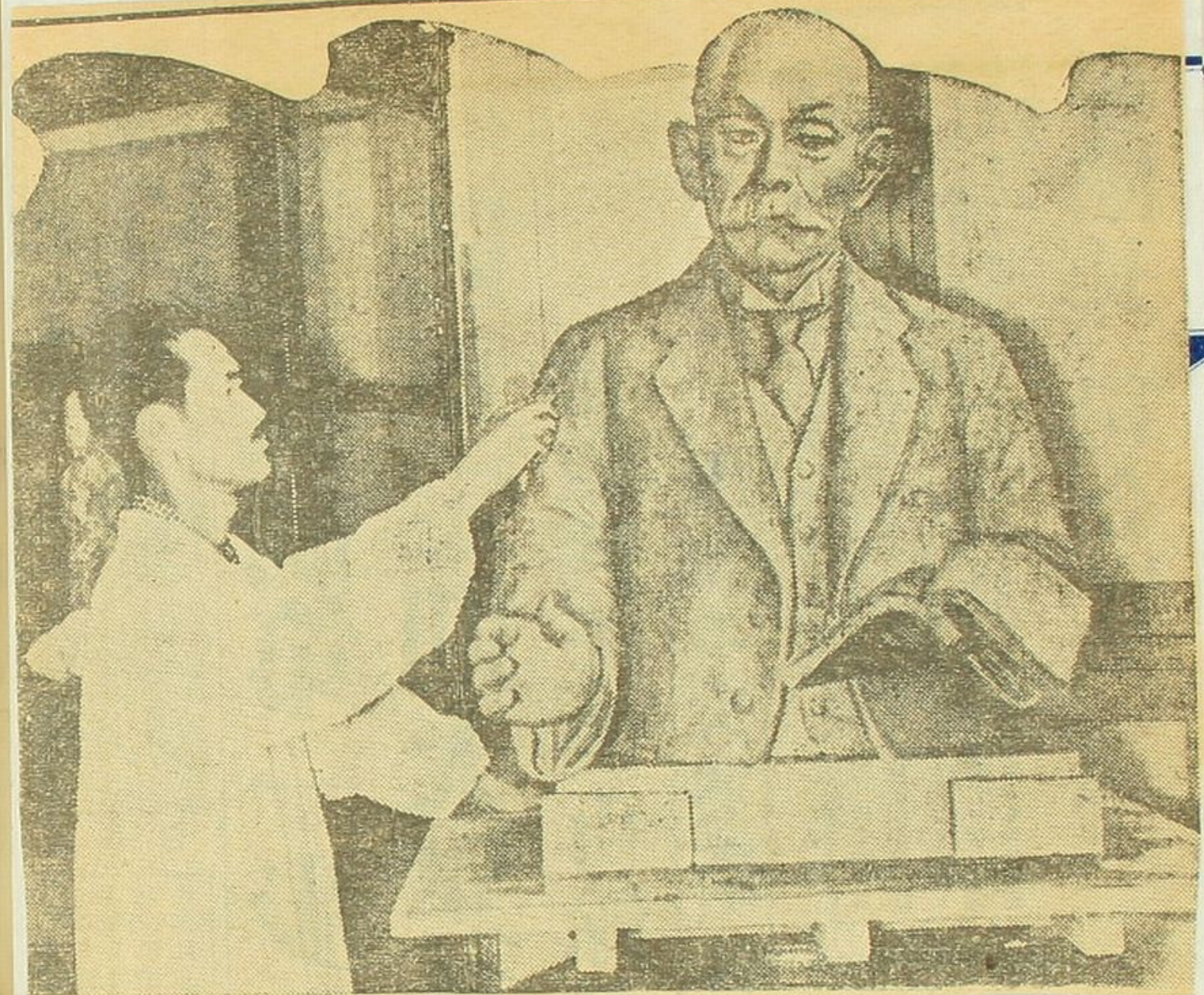
そのつくりとていふに遠く支那の宮廷
 の嬪女の之を粧束の飾として愛用してゐる。美人の姿
 の形が陰部をくくりと心附かすのからてあると云ふ
 香の婦人愛用のよめだが、婦人の此の香が庶民の
 生殖器に附属してある香を世に汚ふよめと
 知るものか愛用してゐる。好む人の氣味附か
 さいことだが徳川時代の男子の粧束容の陽氣
 美の如くである。女の粧束の陰部の如くである
 が、是と氣が付かぬ人々も、既に是を頭戴
 して平氣をある。婦人の人々嫁する時、頭戴を
 帛の被ふんを角かくしと名づけしめる。何
 と云ふ如氣を祀る。富貴があるの如く思ふことか

香の婦人

美と氣のつれなきはくもんを得るしてゐる皮肉な
 考へると此類の事はいふに及ばぬと云ふことあり



の被後五十島島の好
 ると白百合の切り花
 をアングランを送つて
 きれば、一花七娘いすゑ
 此れが、二三の花菖蒲に
 挿み、玄内は、置い
 たり、牡丹の鉢枝
 を、百里先から切り花
 を、貴く、うらハ丸

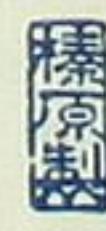


故坪内博士の
 塑像完成
 長谷川榮作氏の力作

世界的文豪坪内逍遙博士の半身像（丈三尺四寸博士より一
 像が故博士の最も練りの深い思ひ
 出の歌舞伎中庭に建立される、そ
 の原形を依頼された東京市品川区
 北品川の彫刻家長谷川榮作氏は博
 士の没後間もなく松竹會社並に協
 賛運送の依頼を受けて今年三月
 着手以來鋭意製作中の處、この程
 漸やく塑像が完成し歸郷部に廻る
 事となつた。富岡では如く博士

脱をもつてゐる。此の子の成を誇りたるは古ゆな行と其
 り芽生へて旧敵を思ひ出し復讐すべき相手か敵
 人である。此の如く復讐は江戸の舞臺を踏んた時、女の
 娼艶の美顔ハ満都をゆ碎せしめたる中、志
 三郎の一人の如く時々の将軍の受容をび、其の
 即ち仇の一人なる目元の木阿弥奉行をばうたじ
 んが将軍の受容宴の間に縁が極威がたたく仇を
 立寄南某の如く此の極威を借りて利福を運ぶとせん
 事。さうして敵が多くなると、まゝを武藝の技
 ことをせざる、悉へるせざるをサシく懊悩せしめて
 將軍の父と失脚し道す、其高き等と利
 怨の考めたるは秋のせて悲境に落すくと云

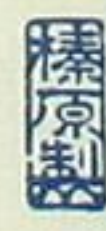
此の世傳と接く、いふは竊盜が有り、（類前記あり） 又志士は
 一もせ賊が有り、波瀾と捲き、（類前記あり）
 興味ももも、盜賊の言を至と、（類前記あり） 及接く、俠義
 あり、失志の少賊が復讐、燃へ、溫柔郷に殺氣
 あり、恂爛と暴戻、錯綜波瀾を捲き、（類前記あり） 後者
 相提、のめ、（類前記あり） 復讐の流の帝衣を
 脱し、秀と悉を削り、自滅をあらしめる所、（類前記あり） 趣
 向あり、熱天に清人の二日を費す、上る、（類前記あり） 一冊七
 百數十頁。
 ○人と議論する、問者、（類前記あり） 任全を占めよ、（類前記あり） 志者の地は
 主つ、（類前記あり） 勿んとい、至空、（類前記あり） 問をよ、他の缺點も、（類前記あり） 演出し



答ふ、（類前記あり） 自身の缺點、他人の棄すべし、（類前記あり） 同隣とささ
 け出さ。
 ○教育の目的、ハベーコンの二字をたると、（類前記あり） 或は賢者
 といふべし。云く、ハベーコンも食ふ、ハベーコンも、（類前記あり） 後者の
 同氏を、（類前記あり） 心うが教育の目的、（類前記あり） ありと、ハベーコンを公
 人の程の生活、（類前記あり） して、（類前記あり） ハベーコンを、（類前記あり） 清く得
 る程の、（類前記あり） 言ふも、（類前記あり） 必要あり。
 ○ハベーコンは、（類前記あり） 蟻と蜂と蜘蛛、（類前記あり） 蟻へも、（類前記あり） 蜂へも、（類前記あり） 蜘蛛へも、（類前記あり） 三種
 ありと、（類前記あり） 説き、（類前記あり） 其内望ま、（類前記あり） べき、（類前記あり） 蜂の如、（類前記あり）
 カニの虫、（類前記あり） ち、（類前記あり） カニハ多く、（類前記あり） 物を集め、（類前記あり） 丸とも、（類前記あり） 自分から加
 へ、（類前記あり） ちり、（類前記あり） ち、（類前記あり） カニハ、（類前記あり） 何事、（類前記あり） ても、（類前記あり） 悠然、（類前記あり） として、（類前記あり） 自分
 の体内、（類前記あり） ち、（類前記あり） 吐き、（類前記あり） 之人を、（類前記あり） 以つて、（類前記あり） 食物を、（類前記あり） 捕ふ、（類前記あり） カニハ

此の光緒を採集し之を精鍊し全く原物と異な
るの瘻を此の嘗者へより斯くの如くすべし
とす。

○自分ハ何れを格別好まらぬが時々千種を
りから小魚の焼いたり焼いたりの焼を
買つてきて下物とす。この小魚七種あるが自分
ハ亦も鯉を好む。鯉の苦味がある。その苦味
が三つと云ふの味がある。復たやらの可る宴
鯉の苦きとめて寝酒のちとあるが、自分が
云ふとす所を道破してある。
○空の徳の輕いかを橋が直立してみる。其の姿
は、其のも傲慢なるが、頭が輕いから斯くあるの
也。



兎角人事は此より感張るやのと頭がカラッ
と思案がするのふかむである。思案あるもの多く福
遊びの感張るを福の聲としての例句に
福の頭を垂らす。福核とあるが其の
○日本ハ西洋より好むと教つた。相違するが由來
西洋の教を授け日本より古く音聲散字がある。
珠に加減乗除の算の法がある。其の法が
終止の人が今も使つてゐる。其の故は捷の
此の西洋の算の遠く及ぶ所は、西洋の算珠
似てゐるが、日本の如く故法の働
きとす。此の西洋から日本へ來れ視察
員と算の算の算、其の此の此の算を

が珠算の操縦するのそと其の目を廻す程の
指先の早さと、其の正確の故を得ることを俟ら

反つて金子若干を納めて、斬つてゐたといふことです、二ッ胴試し、三ッ胴試しと稱し、諸家から禮
金を受けて、試斬りをやつてゐたから餘徳は澤山あつたといふことです。

この首斬淺右衛門も、遂に明治十四年七月二十四日、斬首廢止で、廢役となりました(以上明治百
話の概略)後零落、明治四十四年中死亡、享年五十三才。(生年月は安政元年
九月二十六日生)

山田家は、麴町平河町壹丁目に住居し、斬首廢止後は、父吉利は刀劍鑑定家(以前から)となつて
勝海舟、山岡鐵舟、大久保一翁、黒田清隆などと交際し、斬れる刀の目利を生活とした、晩年佛心
發起、諸神社佛閣へ『大慈悲』の額を掲げ、泉岳寺へ月參、これは堀部安兵衛の劍法を傳へたからだ
といふことです。

麴町八丁目(現在)に大きな屋敷を構え、一万石大名の世帯を張り豪勢に暮してゐた 平河町は吉亮
の住居と、首斬の門人達の住んだものといはれてゐます、(人膽の看板が掲つてゐたともいひます)
母は青山下總守御祐筆後大奥に上り「楓の局」と稱した、縁あつて山田家の後妻に嫁す、女武者修
業をした位、「女百話昔がたりのなさぬ仲」に記す。(以上幕末明治女百話所載摘記)

罪人を斬る呼吸は、右手人差指を下す時「諸行無常」中指を下す時「是生滅法」無名指を下す時
「生滅滅爲」小指を下すが早い「寂滅爲樂」と首を斬落す。

(八月號雄辯所載「高橋おでんを斬つた男」の項私の淺右衛門面會明治三十五年とあるは本稿
四十一年を正確とす)

○書生居一幅の山陽小倉文を齎し、來りて
是れ菊池恒生(遺)物とて今入洋場士に移ん
と云と余は是一運と法ふ、乃ち書生も其不其文
左の如く、山陽の集りて、遠きもよも也外に、
家の小倉を収りて、一巻書入頼翁の本歌
を収む、味谷の宝根を画し、一巻の遺紙

幸卯仲春京の客舎逢之文有以也
不云是南紀山中所産也

林谷山人會信兄為山陽先生
也

林谷山陽記の刻畫の
印を捺す

猶龍對

或問孔子何以謂危子猶龍龍
子曰是邾夫子之言也為危子者
僕造之曰孔子且不能測濤之云
尔書史近之傳時黃老宗言為
天下主不辨其志偽而教之也
余嘗曰論危子戰為人與孔子所
聞禮者自別後人陽人會之耳其
書文雖奇古不類春秋人自其
言及春秋時則無考疑之可



猶余是以斷此山言為偽也
因此之言論之危子豈能猶之
之譬唯夫子可以為之則行食
行放爾山合美之過于宗也
爾也則危子豈如危子一言
猶法之自全哉危子故曰孔子猶
龍者子邪魚

之真

○ 蘇生祖傳の後裔の一人たる佐藤某と云ふ。往年
 四谷に住し、其遺印遺墨を兄に遺し、今更は何
 れ傳の蒲齋、他日印の散佚せんことを慮り、此傳
 あり但傳の墨を兄と認め、乃ち其の一事を
 日某し、乃ち名家遺印某集の内かあへき
 り、伝のこゝに記し、おこ。
 ○ 此傳の南高、鉛賞、二高、佐藤垣の古傳の墨
 後を収め、こゝ前年兄なる藤山某、一高の傳を兄
 んハ、神、来、眼光の炯々、其の傳のこゝの墨を
 兄ハ、免、肩、衣、行、却、名、生、来、も、存、す、余
 の持論を裏出さざるべし。

藤原製

甲申長夏上滿三日 五十三翁坦自題

杉原家所藏のもの、一齋題讚年月右と同時也。渡邊伯爵家所藏
 のものも亦同様にて、華山の款に云「文政辛巳孟秋下濬受業弟
 子渡邊登拜手敬寫」
 又、華山の妹岩本氏の家藏たりし一齋先生肖像稿本あり、後

〔一齋先生〕

渡邊華山しばく、師佐藤一齋の像を寫す、而も
 華山が得意の肖像畫中、最神品と稱せらる。是れ
 師弟の意氣相投合するに因る。

一齋先生知命壽を紀念する爲に寫せしもの、時
 に華山二十九歳、同圖一にしてとゞまらずと見え
 たり。而して一齋翁みな自讚す、其書するもの三
 年後即文政七年也、河田家所藏のもの

一毫似我謂之我可也、一毫不似我謂之非我可也、其似與
 不似者貌也、存於似不似之外者神也、是神也無生滅、無古
 今、盤爲川嶽、凝爲星辰、聚爲風雲、散爲煙雲、磅礴宇宙無
 有不存也。然則其不似者亦盡我也、而況其似者誰謂非我真
 乎哉

第十一



（藏君山觀村下故）稿畫山華 生先齋一

轉じて下村觀山君の有に歸せり。猶ほ河田家（一齋門中の俊足
 河田純齋、夫人は一齋の女）に老年の像あり、一齋七十一歳の
 時また一毫云々の題讚を書す、此像夫人（中根氏）と對幅也。華
 山二十九歳に寫すものは鋭氣、像の眼光に現じ、晩年作るもの
 は人世を大觀したる感、像の顔貌に現るといはる。

○白方が社長在任中の請印創今社が、扱倆ルめし



著者

“IN THE SHADOW OF THE CROSS” 一部ありかたぐいいただき候。
……まだれつから御年少なる御令息の天才的御創作集なることを知り、
驚嘆又驚嘆いたし候、……

坪内雄藏(通称)

授而令息英文御詩集御惠授、本深謝候。一二御拜誦、驚くべき才華に敬
服の外なく、艶羨難禁候、……

誰 (市島香城)

前田客セイヤキレ詩集よむ。余の族の(?)の
と印刷して今方の(?)の(?)

○柳保花江の四字の割違や待合の(?)
こと(?)の字だが、山陽十(?)を(?)の(?)
た(?)話の(?)の(?)の(?)
丸(?)の(?)の(?)の(?)
の(?)の(?)の(?)の(?)

禁酒

い(?)の(?)の(?)の(?)
河(?)の(?)の(?)の(?)
吳(?)の(?)の(?)の(?)

禁酒を誓ひて

黒金の門より堅き吾が禁酒

ならば手がらにやぶれ焚喰

禁酒の誓を破りて

吾禁酒破れころもとなりけり

それついでくれそれさしてくれ

扇歌が席亭の高座に上り聴衆の題に
應じ、若しくは詞の解を索むるに際
り、都々逸の詞或はトツチリトンの
解は實に奪ふべからざる天衣無縫の
觀あり、今尚ほ先月頃まで東京愛宕
山のラヂオ放送局からせし橋之助姐
の唱へたトツチリトンは、概ね扇歌
の高座即吟の遺ならざるはなし、此
は餘りに人の能く知る所なればこゝ

に略することとする。

扇歌一夕高座にて三味線を膝にし得
意のトツチリトンを唱へていふ。

『富士山は霞の衣に雲の帯』
と唄ひ出すや、客あり突然と問ふ、

その帯の結び方はと、扇直に笑つて

『かいの口ではないかいな』

と唄ひ續けた、如何に其の才藻の輕
妙にして空靈なるや。

い(?)の(?)の(?)の(?)
山(?)の(?)の(?)の(?)
あ(?)の(?)の(?)の(?)
八月七日

此紀の終りより左の段がある

歲次丙戌年五月川内國志貴神内知識為七
世天母及一切衆生放送金剛場陀羅尼經一
部藉此善因往生淨土終成正覺

教化僧寶林

此紀を鑑して白鳳時代のものとある所以、跋文中郡
の代りり、評の字が用いてあるから、評は朝鮮
の行政區畫及び日本も白鳳時代、此の所取中事
符字を翻して用いた、其の証拠、今存する金石に
あ、即ち奈後國造碑と大和の法金剛院具の鐘
に共に白鳳時代のものとあるから、これら共二評の



字が見ゆる、尚ほ大和の長谷寺に白鳳の建立とあるから、
か、と、い、る、置、り、ん、と、ある、佛、像、の、甚、き、處、に、刻、し、た、書、体
が、全、然、此、紀、の、書、と、同、一、で、干、支、ま、だ、同、し、い、た、所、か、ら
考、く、と、同、一、人、が、書、いた、よ、う、に、思、ひ、ん、だ、思、ひ、ん、だ、天
平、次、の、書、に、誰、ん、と、ある、こ、と、と、軟、柔、の、よ、う、に、ある、か、こ、ん
ハ、頗、々、剛、健、の、自、體、が、往、々、八、分、七、文、つ、て、ある、天、平、の、体
と、い、全、然、の、異、つ、て、ある、こ、ん、も、白、鳳、に、鑑、す、る、所、以、と、ある、
年、代、花、を、換、え、る、白、鳳、の、天、武、天、皇、の、帝、号、と、天、智、天
皇、弘、文、天、皇、か、ら、天、武、の、帝、号、と、ある、か、人、皇、四、十、一
代、か、此、紀、の、跋、文、と、ある、兩、代、の、朱、鳥、と、改、え、さ、れ、た、
の、過、誤、が、四、十、一、年、は、か、り、皇、后、が、祚、を、割、り、さ、し、四、十、二、代
持、統、天、皇、の、帝、号、と、ある、こ、ん、も、天、平、に、ある、か、ら、

琳瑯閣と云ふは誤りである。此書と共に、おち来るといふ
今早稲田大の蔵書、近年、四寶と定められた。六朝
宮本皇侃の礼記の義疏の二巻がある。元々、
巻に、考の皇侃の印記内家私印の印が捺して
ある。この注意を惹き、時の清田が使物黎庶昌
が精久と云ふ、同一板の同中古山伯の手で、外四
二持と云ふ、と免れ、此は巻の巻末の附箋
一、天平某年と注してあり、この餘り人の注意を
惹く。この自分のことを白鳳と看破すること
出来るといふが、志貴、孫の字を異換する感し
に、又、又書体が天平、孫といふ、若く異、
が、食坊勤と、購ひ入れたのが、自分の手に入つた所以

皇侃

で、ある時、帝室博物館の二、三の者が自分の家を訪ひ
来た時、出して此書と云ふ。此際、校書七白鳳と、唱破
せう、う、の、の、研究と云ふ、と、と、と、と、
九を交付して、孫完、と、と、と、と、と、と、と、
さん、さん、さん、さん、さん、さん、さん、さん、
此書、無、無、無、無、無、無、無、無、無、無、無、無、
中、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、
の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
刻、字、と、同、字、と、同、字、と、同、字、と、同、字、と、同、字、と、
大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

平一といやうな外交手段を揮ひ、彼人の機を見て敵
の機をひかへ直ぐも棄り出さず、機を待つるに照準を飽ま
し抑へた。居座を逃れし機を得たは敵と激すること
もいふことなし。外交界の才一の開士であつたが、遠慮を
ひかすことせむく、時より巧みは轉向した時より巧みは
遠慮せしむ。お手を西攻め後め、待地を奪ひた。
硬骨不似合の骨を嬌を以つて敵を懐柔せし政業
の考りも思い切つて思を敵に賣つた。其の變化の
如く逃れ外國を其の骨を棄つて棄つた。其の變化の
不思議ともいふべき外交家であつた。
彼人のあつて敵を和解し、亦彼人の自らの意
法を制定し、是れ敵を和解し、責任を負ひ、制度を

法を制定し、是れ敵を和解し、責任を負ひ、制度を

宰相獨裁のこのあつた後、人の機を今が大の場を飽
まひ獨裁を欲し、自由主義といふ全然空人をもつた
が、復回と戦ふ時より、四民の後援を欲するは、其の
善道と違ふ法を考へて、そのおを敵に賣つた。
ビスマーの晩年の述懐に、人間のあつたこと、
と云ふは、あるが、少くも、彼を較べんが、ついでに
か、七知んま、保し、人間一人の力が、世界と争ふは、
し、指し、帝國を興隆の道に導き、ついでに、
と、人間を、偉い、よ、い、と、感、
ハ、ビスマーの如き、英雄、
英雄の英雄を、
人物を、交つて、誰か、
人物を、交つて、誰か、

英雄の最後、悲愴であつた。夫市の歿する間も皇太子も致し皇孫が即位し、その子が世界観望の負けて和蘭に捕せられたカイザンが即位するまで、ビスマーリの意向を忘れた宰相の職を解き、その後、志きり、流辱を被り、月給の拂戻しと請求せられ、不潔秘密し、みれ、ことあるが、ふて、ビスマーリと訪問するよ、と私を戒め、誰かの口から探つて、訪ふよ、か、門前在罪を張つた、婦子の婦を奥本村へ迎へ、時、奥市を訪ふんと、奥市も訪問を派し、その時、カイザルは、えんをいひ、奥市を前し、ビスマーリは、貴國の不利を企て、(露清條約を云ふ)と、いふが、

漢京

西の國の可なりと、訪けた。訪りの事、ビスマーリも、勤忍の條を切つて、訪市と内國の不協を、ことを訪、その公事、その内外、獨り、國民も、初め、英雄、夫、その口、情を、奥市も、物、その、安、狂、その、國、民、の、欲、望、が、あ、つ、て、中、を、あ、い、ん、と、な、る、雄、の、こ、の、國、民、の、情、を、入、つ、た。斯、く、い、ふ、ビ、ス、マ、ー、リ、も、愛、慕、を、先、に、し、後、に、彼、の、愛、慕、を、返、す、た。英、雄、の、末、路、の、多、く、悲、愴、な、あ、る、が、ビ、ス、マ、ー、リ、の、最、後、も、甚、し、い、悲、愴、の、最、後、を、迎、け、た。

八月十二日

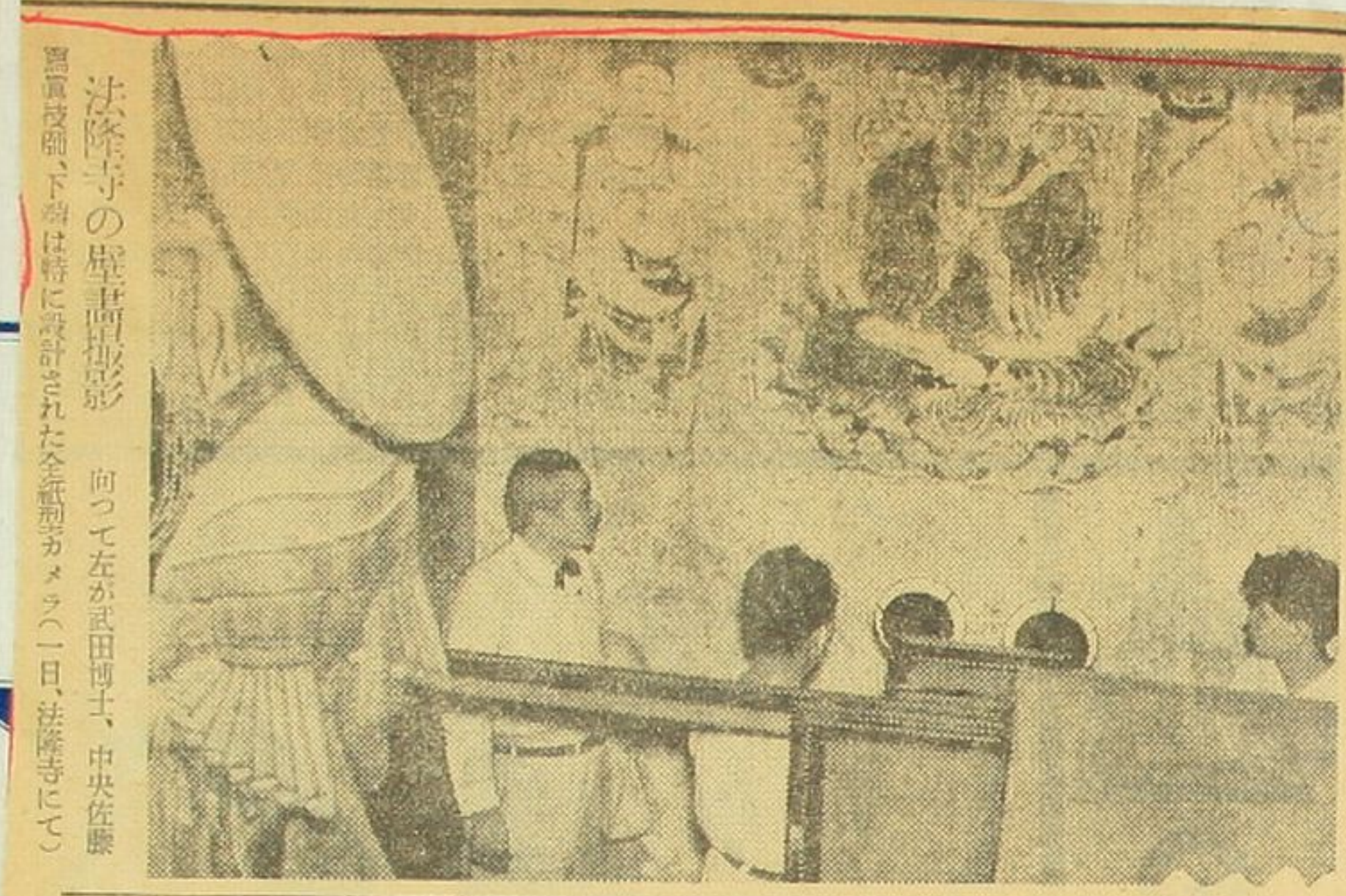
ビスマーリの晩年の述懐、その、偉人の長い後人生、活い、何と、致、し、つ、れ、う、と、い、ふ、と、唯、に、理、解、の、二、字、あ、る、のみ、と、い、ふ、の、さ、ら、外、交、に、事、と、な、る、ま、た、い、ふ、の、理、

○書おのる望社のあなま三から私の地事と
しんらと中は又い来たが二ツの地事と
ぬ今と病い既い印劇中いあるのい花やんの
いんらとが秋まむらり、もの書けむらり
れららと

夫、人、は、信、じ、た、い、く、く、と、既、刊、の、他、著、を、も、取、ら
 ず、心、成、り、玉、末、ま、い、わ、ち、お、ん、ま、い、の、他、著、の、入、り、ま
 り、の、と、致、と、異、な、し、し、り、感、を、同、感、の、書、い、て、見、れ
 り、と、異、な、し、と、ま、い、の、他、著、の、お、ん、ま、い、の、と、百、件
 は、あ、り、ま、い、の、昨、日、の、一、日、を、費、し、へ、下、と、ま、い、ま、い、

法隆寺 金堂の壁畫を
 原寸大に撮影
 わが國最初、大掛りの設備で
 いよく開始さる

大正十一年四月廿一日



法隆寺の壁畫撮影 向つて左が武田博士、中央佐藤
 博士、右が撮影者、下は撮影された金堂の壁畫(一日、法隆寺にて)

千三百年の切ひのなかへ、ジツトリと、ま、い、が、忍、び、込、ん、で、來、る、法、隆、寺、の、金、堂、内、に、壁、畫、の、前、へ、突、立、つ、た、の、は、高、さ、二、丈、余、幅、一、丈、に、近、い、壁、畫、の、ま、い、も、ま、い、大、き、い、とい、ふ、種、な、な、種、だ、こ、れ、に、は、レ、ル、で、上、下、結、核、と、自、由、に、俯、仰、の、舞、臺、の、つ、か、つ、て、あ、る、ん、だ、が、こ、れ、が、ま、い、た、化、物、の、よ、う、に、大、き、く、レ、ン、ズ、の、前、へ、く、つ、つ、い、た、四、個、の、ラ、ン、プ、が、そ、の、四、つ、眼、を、見、た、と、こ、ろ、ま、い、に、法、隆、寺、へ、科、學、の、メ、ス、ク、を、つ、き、つ、け、て、手、術、前、の、診、断、と、い、ふ、恰、好、で、あ、る、シ、ャ、ツ、タ、ー、一、つ、で、こ、の、國、寶、の、飛、鳥、時、代、の、描、法、は、原、圖、と、全、く、同、じ、大、き、さ、の、ま、い、全、紙、大、の、乾、板、へ、吸、ひ、と、ら、れ、る、か、う、し、て、二、枚、一、枚、と、ま、る、で、數、行、で、ま、い、く、よ、う、に、壁、畫、の、各、部、分、を、吸、ひ、と、つ、た、乾、板、は、三、十、二、枚、つ、き、あ、は、さ、れ、て、こ、こ、に、原、寸、大、の、壁、畫、が、完、成、さ、れ、る、の、だ、
 「金堂内です、上衣は着て下さい」と白シャツ姿の撮影隊を立會ひの佐伯法隆寺管長が叱つた、シヤッターの音も轟然と聞える……
 撮影第一日の風景は、これまで法隆寺壁畫の保存は、これまで大正九年

文部省の壁畫保存調査委員会によつて近衛清澄博士がその一部(西側北壁)にいはゆる確化法を行つたが、今回の修理でも果然關係者の頭を悩まして、やれ科擧的延命薬をほどこせの、ほんものを他へ移して複製品を造れのと、異言異出、ところが肝心の佐伯管長は「壁畫は信仰の對象だ、いゝからげんな思ひつきで人手を加へら

れてはかなん」と現状維持で頑張る、これでは修理の具體的方法はいづきまるともわからぬので、とにかく今のうちに複製な現形をこしておかうといふのがこんどの寫眞撮影である
 壁畫の寫眞はこれまで大正八年に田中松太郎氏が十分の一縮圖で撮つたのがあつただけで今度は原寸大で完全な決定版とすべく費用一万余千円、日數一ヶ月半の予定で、製作者も法隆寺壁畫保存工事事務所長武田五一博士が特にこの方面に経験の深い京都市新町竹屋町南便利堂佐藤次郎氏を選んだだけにその成果は深く期待されてをり複製設備も全く佐藤氏半年の苦心になるものである
 一日早朝 京都からトラック一ぱいの機械設備を法隆寺へ持ち込んだ佐藤氏一行はせまい上に何もかも圖書ばかりで針に觸れる思ひのする金堂内のこと、撮影設備の組立てが思ひのほかの大仕事になつて汗ダク、予定の時間がワンと遅れ西壁「阿彌陀淨土」のテスト一枚すんだらもう門限の午後五時……
 かくて撮影第一日を済ませたが、いよ／＼三日から法隆寺内に複製つて十二の全壁面(四天王を揃へた大面四、各菩薩を描いた小面八)を順次に、わが國空前の壁畫原寸大寫眞の本格的撮影に入る
 武田博士談 壁畫をどうするかといふ具體的方法はまだいろいろ問題があつてしまつてないのだがとにかく角高直に撮影しこれによつて壁畫を複製することだけはきまつてある、前に一度撮つたものもありました、年復にもう一度撮ることにより壁畫の剝落汚損などの速度がハッキリわかるし、今度は赤外線寫眞も撮るつもりであるから、いろ／＼肉眼に見えぬものもつくり正しい研究の資料になると思ふ
 佐藤氏談 寫眞の苦心を要するところは引伸して原寸大にするのでなくはじめから原寸大にうつすこと、複製通りのものをつくりあげるといふところにあるです、これでも私は二回部分的に壁畫の寫眞を撮つたことがあり、その時は太陽の光線を壁に反射させて使つて見たのですが壁面全體に光りをあてる上りは部分的に同じ明るさの光りをあてる方がいゝので今度は電氣にしました、設備は東京大機社の小林幸七氏と共に苦心しました、寫眞技術の立場からも、なか／＼野心的なんです(法隆寺)

千三百年の切ひのなかへ、ジツトリと、ま、い、が、忍、び、込、ん、で、來、る、法、隆、寺、の、金、堂、内、に、壁、畫、の、前、へ、突、立、つ、た、の、は、高、さ、二、丈、余、幅、一、丈、に、近、い、壁、畫、の、ま、い、も、ま、い、大、き、い、とい、ふ、種、な、な、種、だ、こ、れ、に、は、レ、ル、で、上、下、結、核、と、自、由、に、俯、仰、の、舞、臺、の、つ、か、つ、て、あ、る、ん、だ、が、こ、れ、が、ま、い、た、化、物、の、よ、う、に、大、き、く、レ、ン、ズ、の、前、へ、く、つ、つ、い、た、四、個、の、ラ、ン、プ、が、そ、の、四、つ、眼、を、見、た、と、こ、ろ、ま、い、に、法、隆、寺、へ、科、學、の、メ、ス、ク、を、つ、き、つ、け、て、手、術、前、の、診、断、と、い、ふ、恰、好、で、あ、る、シ、ャ、ツ、タ、ー、一、つ、で、こ、の、國、寶、の、飛、鳥、時、代、の、描、法、は、原、圖、と、全、く、同、じ、大、き、さ、の、ま、い、全、紙、大、の、乾、板、へ、吸、ひ、と、ら、れ、る、か、う、し、て、二、枚、一、枚、と、ま、る、で、數、行、で、ま、い、く、よ、う、に、壁、畫、の、各、部、分、を、吸、ひ、と、つ、た、乾、板、は、三、十、二、枚、つ、き、あ、は、さ、れ、て、こ、こ、に、原、寸、大、の、壁、畫、が、完、成、さ、れ、る、の、だ、
 「金堂内です、上衣は着て下さい」と白シャツ姿の撮影隊を立會ひの佐伯法隆寺管長が叱つた、シヤッターの音も轟然と聞える……
 撮影第一日の風景は、これまで法隆寺壁畫の保存は、これまで大正九年

元比中二の物... 相長... 出東...

○ビママークとヒットラー。直教のと量公の... 井田...

○月漱松溪山陽の云尚

○名家和印文集

○衛文化神保町

○谷と柔道

○三馬の浮世八景

○信退不可後

○夜這精

○後名早速五巻

○月一の通事

○自分の酒史

○佛壇の候名物の漆華料

○野崎左文

○都今、倉屋埃

○浴室の笑話

○三二のころり

○江戸村の銅像とえり

○天王寺倉

○奥田銅鈴殿

○外田船乗の心

○ビスマークの選り

○トルストイの一日

○心身の伝言

○江戸の親友の伝言

○教子漫筆中の話

○京都の古列をいふを

○山遊り

○丹界と雁群の意を

○先支那の鶏曲

○星炬造の伝言

○示の切名

○東山子傳

○身と目

○美の生法



アラスカフオムラ振法

道楽の巻目

○ 秋風月候まき

○ 雅歌の巻目

○ 秋の巻目

○ 市井の待まゆし山陽

○ 揚助の初まり

○ 楽聖選法三則

○ 浮世伶の巻目

○ 沈没船引まけ

○ 舟橋の漫心術

○ 秋と題名

○ 河原の龍骨

○ 布流の巻目

○ 自今と市山

○ 猫

○ 大石正巳

○ 皇本印刷

○ 子の巻目

○ 勝衣文庫

○ 山陽神女の待帳

○ 舟の巻目

○ 新屋狂の巻目

○ 秋中の巻目



○ 日舞と如物

○ 舞上巻目

○ 和のオアレス

○ 日本珠弄

○ 杖心

○ 杖

○ スタンパ海り

○ 下手物巻目

○ 何れ巻目

○ 五巻巻目

○ 全副巻目

○ 空の巻目

○ リンバット

○ 柳保巻目

○ 自動車の巻目

○ 山中の巻目

○ の巻目

○ 日巻目

○ 画巻目

○ 南巻目

○ 武巻目

○ 白佛上人の巻目

○ 遊巻目

○長崎の海

○山崎

○道邊の二二

○御所の印癖と印巻

○葛原の屋の二見次

○ジエテヤ人界を交へる

○夏の俳句

○ガラスの今昔

○美衣生鏡

○秋の思出

○厨

○北條露亭と柳橋

○高松の酒

○酒造五丁

○心土自慢

○大坂のすまやき

○豊大園と柳橋

○香取節と柳橋

○花

○お田部と柳橋

○書意と文と日記と

○丹那ト子

○回

○ヒコララー日本と



○帯

○樂妓 新づつみ

○北海と柳北島

○浜の昔

○三馬の浮世風を後の

○山陽の和歌詩画巻

○捕鯊突伝

○新大島

○北條の禮(未)二巻

○アイヌと節の記

○随筆を伴うての巻

○料理の二巻

○軍器と巻

○頼三郎の香角

○箱組

○巻石

○文子

○湯沼

○柳橋

○空の巻

○日本書紀

○浮世物語

○アラトフ

○新の巻

○草子と巻

天皇陛下に献上品

ヒトラー—總統から

“嵯峨天皇宸影”

武者小路大使が捧じて歸る

美しき獨逸の心情



【唯一のものであつたが、これを全くこの畏いことがなくなつたわけである「御宸影は、嵯峨天皇宸影」で秋山光夫氏がベルリン博物館で特に鑑賞したもの】

十五日夕、海間丸で眼暗歸朝した武者小路駐獨大使は、ヒトラー總統が畏くも天皇陛下に献上申上げる我古美術の至寶天皇第五十二代「嵯峨天皇宸影」を捧持して歸り、近く宮中の御都合を伺ひ、奉り捧呈する筈であるが、この裏面にドイツ國民の我皇室に對する美しい心情が織り込まれてゐると共に美術界もこの御宸影をお迎へしてセンセーションを起してゐる、尙御歴代の天皇の御宸影で海外に流出したものはこれ

身之雜記

養生記

隱退不可後

自命と酒

自命と桐華

御土自慢

皇恩の思ひ出

村舎の思ひ出

逸筆と心庭と和ふ 秋三郎の筆紙

シヨウク

日誌と雑記

自命と市山

驚き物作

旅の思出

私のオアレス

吾家の書物地

吟吟入

雷をたたく
軍をたたく
昔の紀元法
二重の音をたたく

この御影は今から一千
余年前平安朝の巨匠巨勢金剛の筆
とも云はれ、また遣唐使たりし
小野篁が描き参らせたものとも
云はれてゐるが、いつのまにか日
本を離れてベルリンの国立博物館
に収められてゐた、はじめ比叡山
延暦寺或は嵯峨の大覺寺の寶物で
あつたといはれてゐるが、その後
寺から寺へ、僧から僧團へと轉
轉の運命を辿り、明治十三年頃上
野の観古美術會に一度出陣された
きり遂に日本から姿を消して史家
の疑問となつてゐるものだ
ところがそれは明治三十九年頃
東洋美術研究にやつてきた現
ルリ博物館長キヌメル教授
が骨董屋から買取つてベルリン
博物館にあるといふことが分つ
たのがやつと大正七年頃で
それ以來大正十年頃には三上参次

博士、岡松参太郎博士が返還の交
渉をしたが當時は御影を拜させ
てさへくれず、昭和元年頃には内
務省博士が
返還 運動をするなど、實
に十五年に跨がる懸案の難問題だ
つた、それが今度武者小路大進等
が文部省や日獨文化協會の依頼に
より、ソルブ元駐日大使、在京獨
大使館等親日家の援助を得ての交
渉の結果ヒトラー總統は、他の美
術品の交換等を併して
上の價值を有する物は交換の目
的物とすべきでない
と無條件に我皇室に献上すること
を決定し、武者小路大使をその出
発前特に引見して自ら莊嚴なる贈
進式を行つたものである
文部省石丸學藝課長も淺間丸ま
で出迎へて大使と打合せをした
が、將來帝國博物館でも一般
に拜觀の機會を得たいと文部省
でも希望してゐる

武者 小路大使は語る
ヒトラー總統は、御影が日本
國民にとつて貴重な藝術的價值
をもつものだけでなく、更に崇
高な精神的意義をもつものであ
るなら……といふ深い理解から
僕をわざ／＼呼んで我が皇室へ
御贈進の儀式をしてくれたので
す、ノイラート外相もその席に
待立して嚴肅なものでした、御
影は長い幅のものでずから屏風
のやうなものに懸けてありまし
た、大きな絹本で着色、唐風の
御服装で御手に笏をお持ちにな
り、後繪の山水の御御立を背に

坐し給ふ御姿で、實に立派なも
のでした、そこでヒトラー總統
は「日本の美術品の中で最も大
切なもの一つを、尊敬する日
本天皇陛下に對し奉り、新しき
ドイツの崇敬の象徴として御贈
進し奉る」との意味の言葉を嚴
肅な口調で讀み上げました、そ
れで私も文書で御禮の言葉を述
べた次第です、しかし十數年の
懸案がこんなにうまく解決し
たのは、ソルブ元大使とキヌ
メル博物館長との二人の盡力の
賜物 です、またこの御影
影には落款はなく、黒墨の立派
な箱には「嵯峨天皇御影小野篁
筆」と書いてありますが、作者
が果して小野篁か、巨勢金剛か
はこれから鑑定してもらはねば
ハッキリ分らんでせう
【京都電話】 京都嵯峨の大覺寺で
あの御影像はカイゼルの命を受
けて來朝したキヌメル氏が京
都の古道具屋から買つて行つた
のださうですが向ふの博物館の
目録には大覺寺云々とあるさ
うです、大覺寺の御門跡慈性
親王は、勤王家に在りましたの
で徳川幕府が危険と見て御維新
前無罪に上野の寛永寺へ輪王寺
宮として御轉住をお願した、そ
の際親王が大覺寺から寛永寺へ
御持参になつたとの説もありま
す箱書には寒松院所藏とあるさ
うで寒松院といふのは寛永寺の
山内の寺です

驛荒しの少年
十五日正午頃上野驛の代金引換所
係員小嶋留五郎君(二)が窓下をの
ぞくとたつた今現金十七圓四十錢
を渡した日本橋區横山町三ノ一二
栗下タオル店雇人大川周三君(三)
が黒の詰襟を着た一人の少年に

の人ももうなにも泣かなく、多くの人の御土の自慢
をいふか、貴下の御土自慢も我のいと、第ふく

森下



獄中の喫煙

市嶋 春城

私は四十二歳の頃、重患に罹つて
醫戒を守り、十年間喫煙と酒を絶対に
禁じたが、随分つらかつた。併し禁酒
禁煙も習慣となれば、堪へ得るもので
あるが、旅中の汽車や、旅舎の無聊の
時、喫煙慾が起つてたまらん事もあつ
たが、到頭戒を守り通した。此の禁慾
中は遊樂の興味などは絶無と云ふても
よく、花見などに出かけても何等興が
なかつた。花よりも團子と云ふが、花
よりも酒、花よりも煙とつく／＼歎息し

たことがある。爰に思ひ起すことは獄
中の喫煙である。獄舎に繋がれた経験
が無ければ知れないことである。獄舎
は勿論禁煙の場所、三ヶ月以上服役
の囚人には工錢の内日に三錢の買物が
許されてゐるが、煙草は絶対に禁じて
ある。併し如何に嚴重に監視されても
往々喫煙の禁を犯すものがあつた。そ
れは多くの場合、外役に出で、居る時
監外に在る囚人の朋輩などが、密かに
一捲の煙草を與へたり、或は時間を豫

約して煙草を獄舎高い牆壁を越えて投げこむことなどが、煙草の供給を得る密計であるが、それが發覺すると犯者は閤室に入れられ數日間減食の憂き身に遇ふから、斯る密計は容易に行はれない。獄中の工場などは煙草の香氣が絶対に無いから、誰れか一服喫しても其の香氣で看守押丁がカン付、彼等は即刻取調を初める。勿論囚人は巧みに煙草や道具を隠してゐる。大抵煙草は油紙に包んで地中に埋めて置く、(工場には油紙位はある)煙具と云ふても自製のシガレット、ホルダーで之れを喇叭と呼び、勿論囚人間の隠語である。

私の入獄中に一遍喫煙違犯で閤室に入れられたものがあつた。それは自分

が或る囚人に金を與へたことが原因であつたので、自分も或は累が及びはしないかと氣を揉んだが、幸ひに其事が無かつた。いくら獄中でも矢張り金の世の中だ、金があれば煙草でも何んで監内に引込むことが出来るのだ。自分は地方新聞の記者たりし時、筆禍で罪を得て、其地へ送らるゝ時、見送り人の或者が、若干の紙幣を私の乗つてゐた人力車の内へ投げこんだので、自分の體に多少の金が付き纏つたが、其金は旅中大部分費して僅かに五圓紙幣が一枚残つた。それを携帯の洋書の背に封じこみ、監獄に入つたが、別に使用の必要も無かつたので、或る囚人の請ふに任しそれを與へた。自分は其時

云ふた「お前さんはこれをどう使用するか知らないが、どんなことがあつても此の金の出處を明かしてはならぬ」と固く誓はせた。勿論此の金が煙草を購ふ資とならうとは想像もつかなくかつたが、後に至つて煙草を買つたことが知れた。勿論自分は一服でも其の分配を受けたことはなく、亦禁犯してまで一服二服の煙草を喫したいとは思はなかつた。當時はまだ紙巻の煙草が無かつた頃で、五圓全部を刻煙草を買つたとしたら、隠し切れない程多量のものであつたらう。若し又一人で内密喫したとすれば一二年で喫し盡せない量であつたであらう。全體囚人は喫煙慾の強烈なもので僅かに一掬の量を朋輩に

與へても狂喜を博する程のものであるから、煙草を所持するものは獄内に肩身が廣く、大袈裟に云へば威福を弄し得る位なものだ。且つ他の囚人の日々許されてゐる買物と交換も出来ることだから、此の人は多福長者である。それほど煙草は大なる魅力を有するものだが、段々其の分配が擴がるにつれ、監視者の鼻が許さない事となつた。そして、某囚は終に閤室に投ぜられ減食の刑を受けたが、金の出處はどう辯じたか、私に崇りが來ずに済んだ。自分は知らぬことゝは言へ、喫煙に渴してゐた若干の囚人に煙草の振舞をしてやつたやうなものだ、と思ひ起せば一笑を禁じ得ない。

二博士 岡松参太郎博士が返還の交り
を決意し、武者小路大進をその出
坐し給ふ御姿で、實に立派なも
けて來朝したキエンメル氏が京
都の古道具屋から買つて行つた

○市の沿革文書の漢(四百餘頁)既に出版
成り、沿革早編(三百三十頁)又既に全
日後の沿革の漢とせし、勸業の編分りし
るに、特々日本風味の編りしものも編り交し
る春城函法へある餘頁)も全訳校り、直
に出る人として、自らの報告をもつて、
るころ、青物店に社へ出せんとす、
七か道のり、岩お成り、
日の高七月一杯か、
四冊の沿革と出さう、
東北を極め、併し、
九月六日

○余が四時の北行の漢三十二年富家の故湖
月富と杉の中尊等、
張山侯と見、
訪ぬ北派紀程二冊あり、
るより、
沿革とぬめんとして、
をえ捨す、
内アイヌと漢の記、
し、
う、
夢の、併し、
九月六日

九月六日

著名な人の私印は自分ばかりでなく他人も珍重するが、或るものを手に入れるには相當に骨を折つた。高芙蓉刻の尾藤二洲の藏書印や、書誌學者の狩谷掖齋の私印や藏書印は、他人と競争してまでして手に入れたこともある。何んと云ふても自分の常に崇信してゐる人物の用印や、自分と郷國を同ふする藝術家の用印などは、取りわけ自分の趣味に投じ、自然に手が出る。自分の崇信してゐる人の印には、幕末の傑士川路聖謨のが全部ある、中には佐久間象山の刻したものもある。自分と郷國を同ふする名家印には卷菱湖があり、大倉雨村、池田孤村などがある、池田孤村は抱一門人で其遺印全部數十顆が手に入つた。

諺に『小人罪なく璧を抱いて罪あり』と云ふごとく、印も美材である爲めに磨り潰される。名家の私印が長い間にどんなに多く磨り潰されたことであらうか、中には傳ふべきものも多々あつたであらうに。これを思ふと洵に惋惜に堪えない。私名印の貴さは、其の材にあらずして、其氏名にあるは勿論で、材の粗なるが故に、完きを得て居るものには頗る注意を要する。

日本の或る時代には佳材が幾んど無かつたから、粗材の印を搜すと往々意外のものに出遇う。『東西遊記』の著者春暉堂橋南谿の印や、篠崎小竹の父三島の印、高久雷厓自刻の私印、山中信天翁の自刻印などは皆粗材であるが、コンナものを拾つて活かすのは全く鑑識の力で、骨董屋などの能くする所ではない。自分は粗材に古名家の遺印の多く存することに氣が付いてから、粗材のみを漁つたこともあるが、仇敵を搜すや

うなもので、意中のものにはなか／＼巡り遇はないので失望もしたが、此蒐集には實に二十年を費した。

蒐集の歲月は可なり長いが、其の結果は數に於て僅かに二百四五十顆で、自慢する程のものは極めて稀である。今ザツト前に掲げた以外のものを舉げて見ると、貴族には東坊城菅原聰長、石州濱田侯松平武脩、間部松堂(閣老)、牧野康哉、秋月種樹、木戸侯、土方伯、前島密等があり、學者には會澤正之、丹羽伯弘(新發田の藩儒)、重野安繹、中村正直、高橋泥舟、中島子玉、細井九阜(廣澤の子)、辻元菘庵(醫)、佐藤立軒(一齋の子)、高島秋帆、林鶯溪、淺野梅堂、藤本鐵石等があり、畫家や文人には、山本梅逸、高嵩谷、細川林谷(印人)、古川鐵畔(印人)、圓山大迂(印人)、藤田吳江、俳人鶯笠、片桐不偏齋(茶人)、永井禾原(詩人)、董堂敬義(書家)、長三洲(書家)、吳雪樵(俊明の子)、田必器、河鍋曉齋、日柳燕石等があり、支那人には林則徐と説文家の吳大徵外三四名あるに過ぎない。

自分は常に思ふのに、名家の私印なるものは、宛かも其人の位牌の如きもので、浮屠氏の作る位牌よりも遙かに意義が深い。骨董界では名家の手澤を経たものを格外に珍重するが、名家の手澤を最も深甚に經たものと云へば、恐らく其人の私印に優るものは無からう。此物が常に其人に追隨し、其作品には常に捺されて證とされ、其の捺する毎に其人の指紋が鈕に附着する、作者の魂魄は宿つてこれにありとでも云ひ得るであらう。

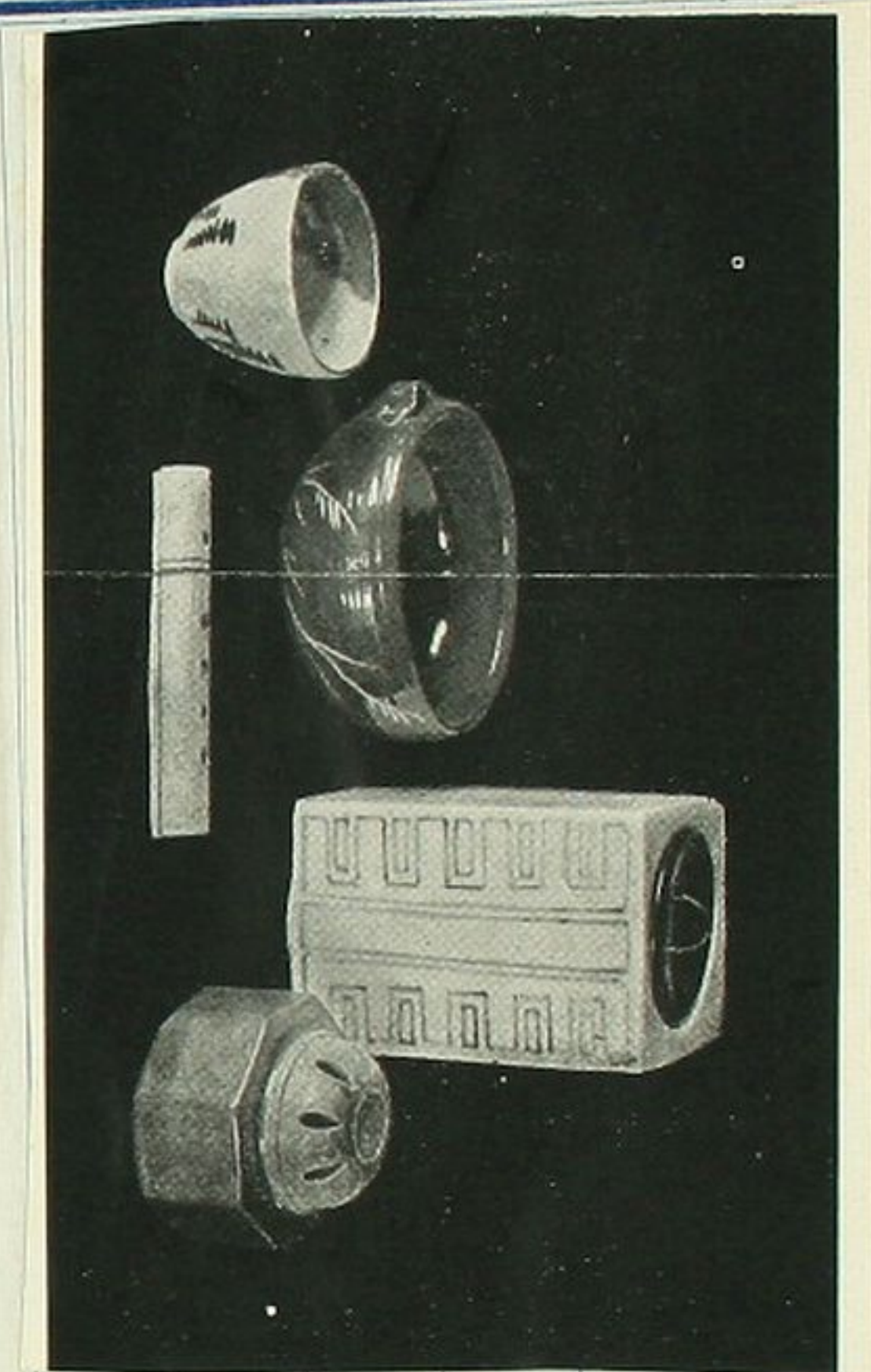
文人の習慣として、其人が歿すると遺印を棺に納めること

が毎々ある。菊地溪琴の遺印はすべて棺に納めたと菊地晚香から聞かされたこともあり、つい此頃聞いたことだが、物祖徠の印はこれまで遺族の手に存してゐたのだが、其散佚を恐れて近頃徠の墓に納めたと云ふ。これにはいろ／＼の意味もあらうが、其人と離る可らざる關係があるから、生前通り其身邊に置くのだと解しても差支あるまい。

或は印を棺に納めることを惜んで、其印面に聊か刀を加へて保存することもある。これは再び使用せぬ用意からで、厩作の利用を防ぐからでもあらうが、故人の命が打ちこんであるやうなものだから、其の子孫は勿論、他人に於てもこれを粗略にしてはならない。飽くまで呵護して永久に保存するのが故人に對する禮であらう。

文人墨客が使ひ果した敗殘の退筆ですら、鄭重に地下に埋めて筆塚を作る慣習から考へても、名家の私印は何等かの方法に據つて保護されねばならない。或は堅牢な金庫式の堂宇でも設けて之れに納めるのも一案であらう。斯る堅牢耐火の置き所があらば、各家にある祖宗の印も追々之れに寄托することとなるであらう。名家印蒐集に就いて聊か所感を陳べた次第である。

○延喜年中谷あといふ人の撰ひし歌仙料理
 といふ書の総説を讀み左の十則を得流石に
 人の言味あへし、三十六種の料理の献進を
 おけ三十一の歌仙と見えたり也



- 一 色のお念いせよの ちきり赤白里
- 一 塩梅五味
- 一 盛り方山あをかたひら 聆と山と元まの
- 一 遠東の珠物喰えんのみと地走かりと思
 以他を属眼する物也
- 一 おのれか好まざる物を念ひかへざるを云
 ぬし。
- 一 初まを料理才一の地走とすんじ時をぬ
 初ハ吟味を要す別と葺敷入意を
 用ふべし
- 一 七の料理の流に海のもの初おき山陰
 のもの初おき、海鮮の走り油うす

から掃らる。其の一端を春の風はよもよもしく
 言のまひりてく取味。物の認識も起つて、
 認識もくして何物も對しても取味を感ずる
 ことか其来るまで、和の不受もくも若い人達も對
 し認識を呼び起さんとする。心ち、定、日
 本精神も此等特異の取味の向は存するの
 ことか、
 神と維持模範もくもく、勢い其の物神
 の書、潜在する、物般の日本趣味を今得
 せぬかば、ぬ、
 とんか本書を出す
 所以である。



〇二三〇 閑て任せて
 英詩人バイロンの
 作を後人の年
 社の以る者で後
 人たこともあつた
 吟の昔生をバイ
 ロンの放埒に新風
 一にこのかちうた
 英四のバイロン
 をミルトンと並
 べ称するのみ併
 一大詩人ゆけん

此は彼の傳記に流瀾と云ふ彼もさうして居る人物
であるがどうも詩人と云ふよりも、平極るものがある。彼
の著書の家と生れは風貌に死するの美は、女と生
ちやあや云いんれが生んるよりさうして、十んばあうれ
るの故に、母と娘のれ、彼は天才肌で、我儘の心ある
れが、家庭とあまは、祖國から進級の身とさう
て、ちの伊を利とて、政浪れ、彼のの有名の詩も
多く、政治中のさうさうのれ、ヤイルド、ハド
ヤドンジエア、ンもいかに、せんじある、就中、後ある
政治中のもの、れ、朽の潜心とせんせある。
彼の、一旦、妻を定むれ、さんが、氣の入る、別居す
ること、さうな、い、あ、くの、婦人、を、國、に、中、の、伊

海河

大判の号紙の裏と、哲人、以、徳と、流、び、男、妻、に、一、境
越、いの、れ、にも、あ、る、は、ん、の、美、貌、を、あ、つ、れ、か、く、●
● 二、事、を、結、く、こ、と、の、さ、う、れ、が、彼、の、注、文、の、あ、つ、つ、し
● どの、情、婦、も、あ、つ、き、か、し、さ、う、れ、は、彼、の、金、を、い、か、ち
ら、う、れ、の、さ、う、さ、う、三、三、の、借、金、も、あ、つ、れ、あ、つ、れ、
併、し、彼、の、詩、が、七、七、や、せん、の、男、の、ぬ、い、と、多、か、つ、れ、
又、不、ろ、の、身、を、と、ま、り、し、て、さ、う、の、金、を、得、れ、
借、金、を、押、つ、ら、う、れ、の、さ、う、さ、う、の、身、の、つ、あ、つ、つ、
れ、が、い、く、ら、借、金、の、あ、つ、つ、七、七、の、馬、車、の、い、か、
破、命、の、用、車、を、つ、つ、の、○、を、流、り、中、に、推、つ、れ、
動物、が、ぬ、き、い、ら、く、の、動物、を、集、め、さ、ん、を、い、こ、
行く、つ、も、休、め、れ、● 海、の、今、昔、な、と、ブ、ラ、ン、デー、を、● 飲、と

から十二月大晦まで一〇七日のすこく、日徳を代
て勸善の語を新しとある。ハムストイセウとく、初
善と勉めれよと云ふ。

○燈台元啼く真柏の産地が今う城後の
里姫山にありしことを知るは、或は家木
彫りか、或は石を造るの遠く望んで、真柏
を認めれよと云ふか、或は善の如き凡眼より山を
行を目こ入るは、絶望を生じてみる。此を裁
を詩のり、或は余のけの葉が、風吹く産
けんと、仲張も許さんとの自然大木の形
相を具ひて、少いといふ出に趣がある。

藤田

右	左
山形	山形
秋田	秋田
岩手	岩手
宮城	宮城
福島	福島
茨城	茨城
栃木	栃木
群馬	群馬
埼玉	埼玉
千葉	千葉
東京	東京
神奈川	神奈川
新潟	新潟
富山	富山
石川	石川
福井	福井
山梨	山梨
長野	長野
岐阜	岐阜
愛知	愛知
三重	三重
滋賀	滋賀
京都	京都
大阪	大阪
和歌山	和歌山
奈良	奈良
徳島	徳島
香川	香川
高松	高松
愛媛	愛媛
高知	高知
福岡	福岡
佐賀	佐賀
長門	長門
大分	大分
熊本	熊本
鹿児島	鹿児島
沖縄	沖縄

（二十）

姫の富

主 眞柏尋ねて

「私は命知らず奴と嘲つた、そんなことに氣をとめる多平ではなく、郷里から弟幸助さん（現在小瀬村に住む明星山一帯の眞柏採取権を得た）を呼び寄せ、本格的に眞柏の採取にとりかかった。一度は「命知らず奴」と罵つた村人も「あんなものが高値に賣れるとは、さうも知らなかつた」と、指をくはへて引きたつた。

この山、眞柏王多平を黒姫山近くの清水谷にたづねた。一本の眞柏五千圓、六千圓はさらさら、一畝圓つた、村の人だつて手放せないと、眞柏もの

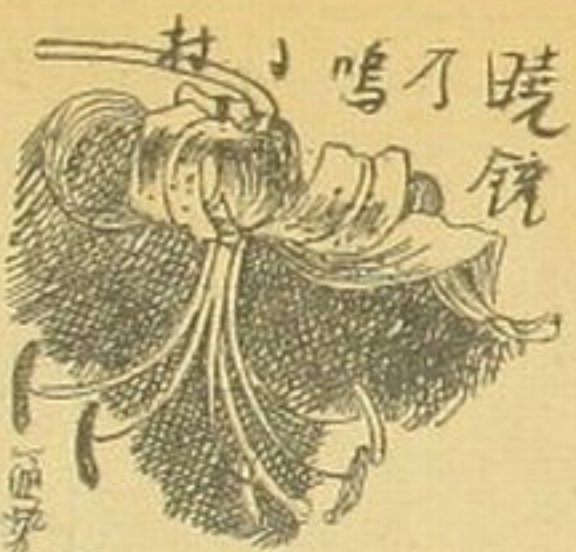
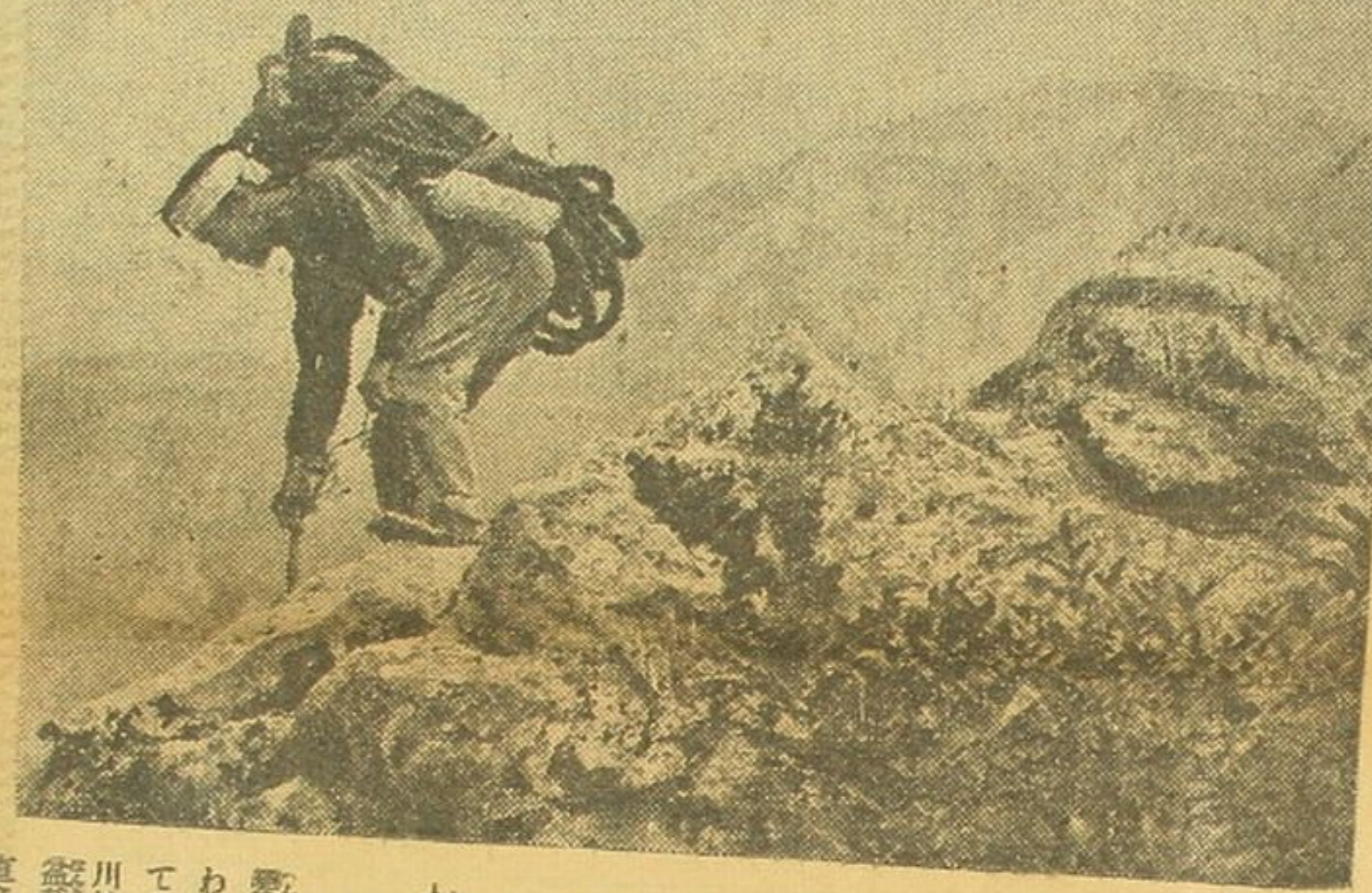
と聞かされ、驚いて多平を訪れたのだ。さだめし龍宮のやうな住居と想像して行つた私は、二度ビックリした。一間きりの楓立小屋ではないか。

多平老の生れは愛媛縣宇摩郡川村。自ら變入多平といひつ、その生立ちをボツ／＼語る

「私は小さいころから山が好きで、廿五の時、日向の山中の眞柏採取権を十圓で買つたものです。これがあつて二萬圓ばかり儲けまして、その金を全部兄に託して日本中眞柏行脚に出かけ、直江津から伏木に向ふ途中、親不知海岸の沖からいらんだのがこの黒姫山です。最初、私が腰纏で身をしばり、五百尺、或は二千尺の眞柏を下り、金種とノミを持つて眞柏を採るのを見て、「命知らずの馬鹿多平」と村の人はいつたさうです。その後、眞柏が高値に賣れることを知つた村の人は、その採取をはじめたけれど、不馴れのためか、これまで十五、六人が眞柏と生命をとりかへつた。昨年の暮、東京の人から三百圓送つ

て来て、價格に相當するものを送つてくれといつて来たが、この黒姫山を見たものでない、眞柏の本當の値打はわかるものではない、私は金を送り返しました。人をだまして金儲けなんかせんぞい」と昂然とした

眞柏は高山植物で、若くて五十歳くらゐから五、六百年、中には一千年以上を経たものもあるといふ。「私は山から採つて三年は絶対に賣らない、早く金に代へれば自分には都合がいいが、買つた人の氣持になつてみる、萬一枯れたらどうする、それも眞柏と名づけたのは東京の人ですが、ヒラカン（平幹）ネチカン（ねぢれた幹）が珍重される」と語つてから、ユムヤギを脱いで「この足をみて下さい」といつた、その足の爪先は、黒から黒へひつかけため、黒の足のやうに不具となつてゐた、若の永年の眞柏生活を物語るものであつた（眞柏は多平老が危殆を自して眞柏を採るところ）——藤田市助この項終り——



金槌とノミで

耕す”黒姫の富“

『變人多平』命を的の放れわざ

益裁の王 眞柏尋ねて

變人多平、正直多平は、小さなし
わくらやな衛して眞柏に水をかけ
てゐた。益裁の手、眞柏は、糸魚
川地方人のほこりである。眞柏が
益裁の王だつたら、變人多平、正
直多平はまさに眞柏王であり、眞

景風線新道鐵
嶺の元祖といつていい
時は明治四十四年の暮四月、直江
津を出航した。この船は、日本海
の霧にもまれ、伏木港へ向つて
ゐた。チツと山岳地帯を見まもつ
てゐた中年男、アツと一瞥渡した
ま、駭々として考へ込んだ。中
年男は伏木で下船するといきなり
山越え、袋敷まで行くのであつた。
これこそ若かりし頃の變人多平
で、その通りついたのである。山
また山の黒姫山であつた。かくて
かれは斷崖屹立の黒姫山へ、毎日
圓、六千圓はさらにある、一萬圓
よち登つて眞柏を採つた。村の人
だつて手放せぬといふ眞柏もあ

「私は小さいころから山が好きで
した。廿五の時、日向の山中の眞柏
採取機を十圓で買ったものです。
これがあつて二萬圓はかり儲け
まして、その金を全部兄に託し
て日本中眞柏行脚に出かけ、直江
津から伏木に向ふ途中、奥不知海
岸の沖からいらんだのがこの黒姫
山です。最初、私が斷崖で身を
しばり、五百尺、或は一千尺の斷
崖へ下り、金槌とノミを持つて眞
柏を採るのを見て、「命知らずの
馬鹿多平」と村の人はいつたさう
です。その後、眞柏が高値に賣
れることを知つた村の人は、その
採取をはじめたけれど、不馴れの
ためか、これまで十五、六人が眞
柏と生命をとりかへつた。昨
年の暮、東京の人から三百圓送つ
この項

から十二月大晦日まで一〇七欠のすこことさへ、
て勸善の活かすことあり。トルストイとさる
善と勉めぬことあり。
○燈台元味、眞柏の産地がさう
里姫山にあり、その山は、眞柏の産地がさう
恥河が、知らぬことを通る、遠く聖人
を認め、こゝろが、眞柏の産地がさう
行を日に入らぬ、絶望に生かしてゐる。
も待たぬ、死ん、余り、眞柏の産地がさう
けん、仲張も許さん、眞柏の産地がさう
相と具ひ、少い、眞柏の産地がさう



○九月十三日 安田印の所記左の如し
 仲傳 木那堂金 正嘉三年 正刻銘
 あり、加清頻かきもの節と初し、有標是所
 の所持ありとも 四箇に指定せんとも書
 標しとも安田の 野々末と安田の書標と標物
 録く安田の書と 初めたりとも、聴かす安田の
 り安田の書と、初めたりとも、録かす安田の
 本心と認めんや、作者の承
 他とありの如し、思ふ
 知印一類 古名相とて、培
 玉砂の其所とて、名を伝へ
 たりとも、安田の書と、録かす安田の



正次加納藏丸の通し出の、安田の書と、録かす安田の
 う、安田の書と、録かす安田の
 安と名心とて、録かす安田の
 正の書と、録かす安田の
 正の書と、録かす安田の

康上印の流が、出の時、三村流の、古の流、安田
 蓋屋と印流があり、この流の、謎あり、安田
 安田の書と、録かす安田の
 七の流の、謎あり、安田の
 安田の書と、録かす安田の

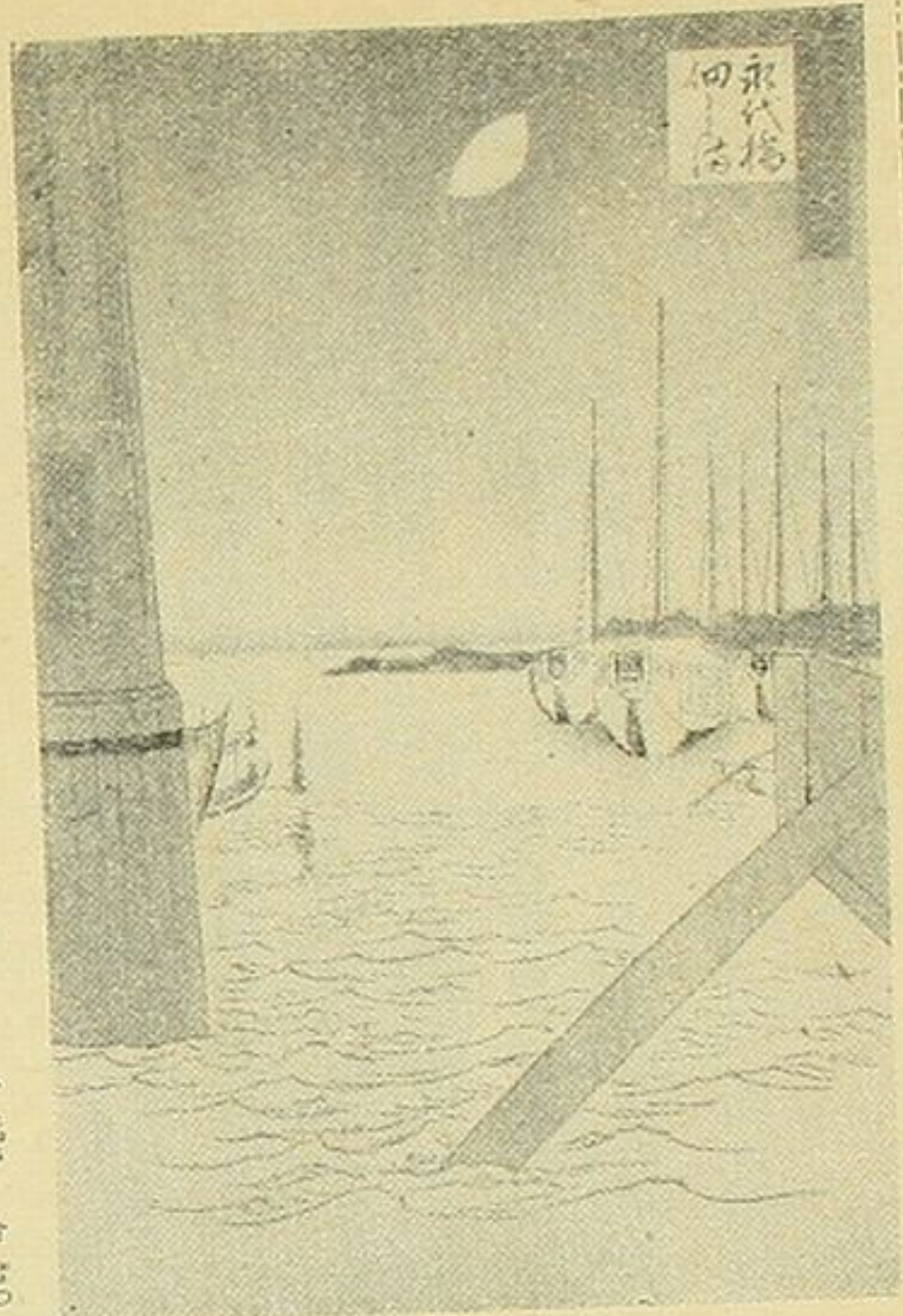
此日安田へ、安田の書と、録かす安田の
 千前、古字、古字、九通、録かす安田の

自前年一秋、自分附添、あつて引渡す(元
月十三日)

○毎日能く習ふも古く習候のあつて人の書簡を抄ける
つれづくに能く抄の冊子と改味のり工心とする
ことが考へられ行われり。雑記格の無地
の紙を用いるものあり。罫紙を用いるもの
あり。無地の紙より五色の紙を使用し、また
と種々色紙の紙を用いるものあり。罫紙も自
らの改味も色紙もやうに用ひし。まを摺り種
々の色を用ひたりする。或は香紙の花を紙に
貼付して装飾とすることもある。右もまよく思



く、相魚の花をいひある。標紙七色か念道
か自分作のものがある。是の種もあるが、千紙の
書簡をも花横に張り交せたりするものもある。或
は印契歌切の杯本の切れをも標紙の表と裏の
註のあるものもある。或は所持の上田秋成の
雑紙の標紙に堂に四五ヶ所切斷して色紙のか
大かへい○とめてあり。標紙を志らやうな
の虫あややうな紙と思ひ、雑紙の内容を記し
し思ひくが、あつて、珍筆も持つ人、元文を志
し味をつけておるが、多くの人の友人から寄せ
書簡も其儘貼りこみたりするものあり。印癖ある人
の印契も張りにあつて、古紙家へ其杯本を張りにあ



あります。そしてそれによつて此繪の圖取りは非常に奇抜に見えると共に、その橋下から眺められる遠景や紺色の空や上弦の月や白魚船の篝火によつて、夜の大川の情趣が身に沁々と感じられるのです。この圖は廣重の作中でも代表的な傑作です。然るにこの日本の浮世繪の構圖と色彩を、その儘の暗示として、萬里を隔てた英京ロンドンチームス河畔の夜景を描いたのが、このホイスラーなのでした。もちろんそれは、廣重の圖を

上圖は、初代廣重作「御所江戸百景」中の「永代橋夜景」で下圖は、英國畫家、ジェームス・ホイスラー作「チームス河」の夜景です。この二圖を比較すると、一方には橋梁が描いてない一方には描かれてる。一方には月と星がある。一方にはそれが無い、と云つた違ひはあるが、大體に於いて、兩圖の構圖が頗る近似してゐる事を氣付かれるでせう。是は誰が見ても判るやうに此の廣重の繪の中心は、高く中空を抽いて立つ長い橋杭に



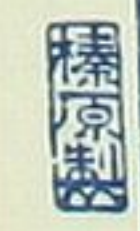
橋の夜

其儘真似たものではありません。例へば廣重は、墨色の空や淋しい篝火などで、夜更の色を充分に現すと共に、高い橋杭にも夜泊の親船にも、細い線描が用ゐられてゐるに對して、ホイスラーの「夜景」は、全然線描表現でなく、没骨的な色ばかりの表現であります。ホイスラーはエッチングなどでは、細かい線描を得意とした畫家であるのに、「夜景畫」の幾枚かでは全く觸れ、は溶けさうな柔らかな色の情趣を生命として居ます。そしてこの色の情趣に相應しい構圖上の用意として彼の探んだものは、是が油繪かと思はれるやうな簡潔な蕭洒な構圖でした。それもさうでせう、この一切の繁褥を棄て去つて要領だけを力強く表現すると云ふやり方は、全く彼が、廣重、北齋、歌麿等の日本の浮世繪畫家から學び得たところなのです。日本畫の御手本が無かつたら、恐らく西洋人には、このチームス夜景圖のやうな氣の利いた構圖は考出せなかつたのでせう——今でこそフランスの若い畫家の中には、例へばデフキのやうに我々をも驚かさうな蕭洒な構圖を作り出す人があられるけれども

ホイスラーは、十九世紀の英國畫界を代表する大畫家の一人です。併し彼の一八六四年頃までの作品は、佛蘭西近代寫實主義の頭目クールベ、英國ラファエル前派のロセツチなどの影響が顯著で、飽迄も西洋的であつたのです。然るにこのチームス夜景（これは原畫題では「藍と金の夜景」(Nocturne in Blue and Gold)で、他の「墨と金の夜景」「藍と銀の夜景」と共に一八七七年の作）では、前述の巴里博覽會から十年後の作品で、フランスでは、日本畫の明るい色彩にヒントを得たマネ、モネが、官展に對して印象主義の畫風を唱出した頃なのでした。

日本橋下の水は、倫敦橋下の水に通ずと云ふ誰かの名高い詩があります。これが廣重とホイスラーの場合では、永代の水が、チームスの水に通じたわけなのも面白いことです。

○水谷八重子の義兄水谷武(西竹社)死去、廿
月迄如書に曰く所禁乃水谷武儀九月十四日午前
二時二十分暗死に由ありし中し永代休む旨
此後御も御申上候此も御文の一紙例も
多衆お守りの人を思ひつきて、善
く、優し味かありて人の口術も悪く、善
く、親戚友人も生前の交遊を謝すと云く
か、隣人の人の口を藉り方力あり、保く此之
例の或る程の人と限るべき、勿論也
○市井政書 係士も白玉梅中の人ころん
係士と梅中、後次介本邸一邸、殊に懇親の
関係があらん、よく本邸宅に合し、此れが本



○市井の父盛重の後、新島の社長いあり、此
の、自ら口社に記ありし頃、盛重を訪る
三係士に教へ、令し、此れとある、市井係士の平
福の、大子の法科を教ふる来り、ともある、り、
音く、懇志せあり、梅中、真面目の人の梅
係士の如き、大氣横溢の人の、さる、法典、
美か、才、切か、授け、得る、松春院、
年を送り、此れ、若い、頃、
時々、此病の、若く、
享年七十八と云く、
此れ、
九月廿五日

地は大陸的であるから外人の素は投するのでも
所謂大陸的である特徴は地帯が規模大きく土
地が乾燥し、空気が乾燥し、暑ること多いが、
一種のハラハラ感があるが、夏は涼しい、
秋は涼しい、冬は寒い、春は暖かい、
風土も多量である、所から斯う土地を選ばないと思
儀が多い、強ち原始的の土地を故郷と云ふと思
ひ、日本の梅雨氣も入ると北海道を陰影し
内地の濕氣が多く、外人の利處地たる所は
さういふを避けるも乾燥の空氣の横溢す
所もさういふが、日本も今の大陸的の風
氣も一種の氣味として認識するやうである



此の書は實は、
のトレストウの一日一善は、
如く云ふのである

人の此世を生ん出の時、
私のもよみと断言す、
世とある時、
さい、何れ持て行かざるのか、
し、

の人間と云ふ奴は、
強烈の怒を持つてゐる、
を達するの満足も、
人々想存日と云ふ肉体的、
味をつけたる

つげよも言ひ後人の附合ひ、空守り及酒に解す
 へきむあふ、難き終らぬ醜状が金鏡飽くことと
 知らまへ怪獣ひまろ、こんと公器の壯節、
 刻まうの、難き終らぬやうに浮山、ひまろの迷
 ひまろ。日本より夫物の面と杯、長く完出
 此岸を拓け、之れをす、置くる由ら、
 のの、多く酒をす、め、所以ひあつ、ん支那、
 らん、んをも款器と曰、訓戒の意を寓
 心と謂、ん歎、又蛇蜂と書、杯あり、さ、
 のまの迷、ん、ん、ん、ん、
 意を寓、ん、ん、
 ○一と次都下の考古家を数おし、七派、

漢書

一此こと、
 過き、

一 貴族派 (松浦仙、小杉櫻打等)

二 天神派 (根岸武香、山中笑、奥村繁次
 印法、水崎、等)

三 森門派 (村井正五、八木精三、今大、
 外島、辰龍三、等)

四 持物派 (三宅米吉、里川真道、
 五 原所派 (関保、助、野中、
 五所、
 五所、
 五所、

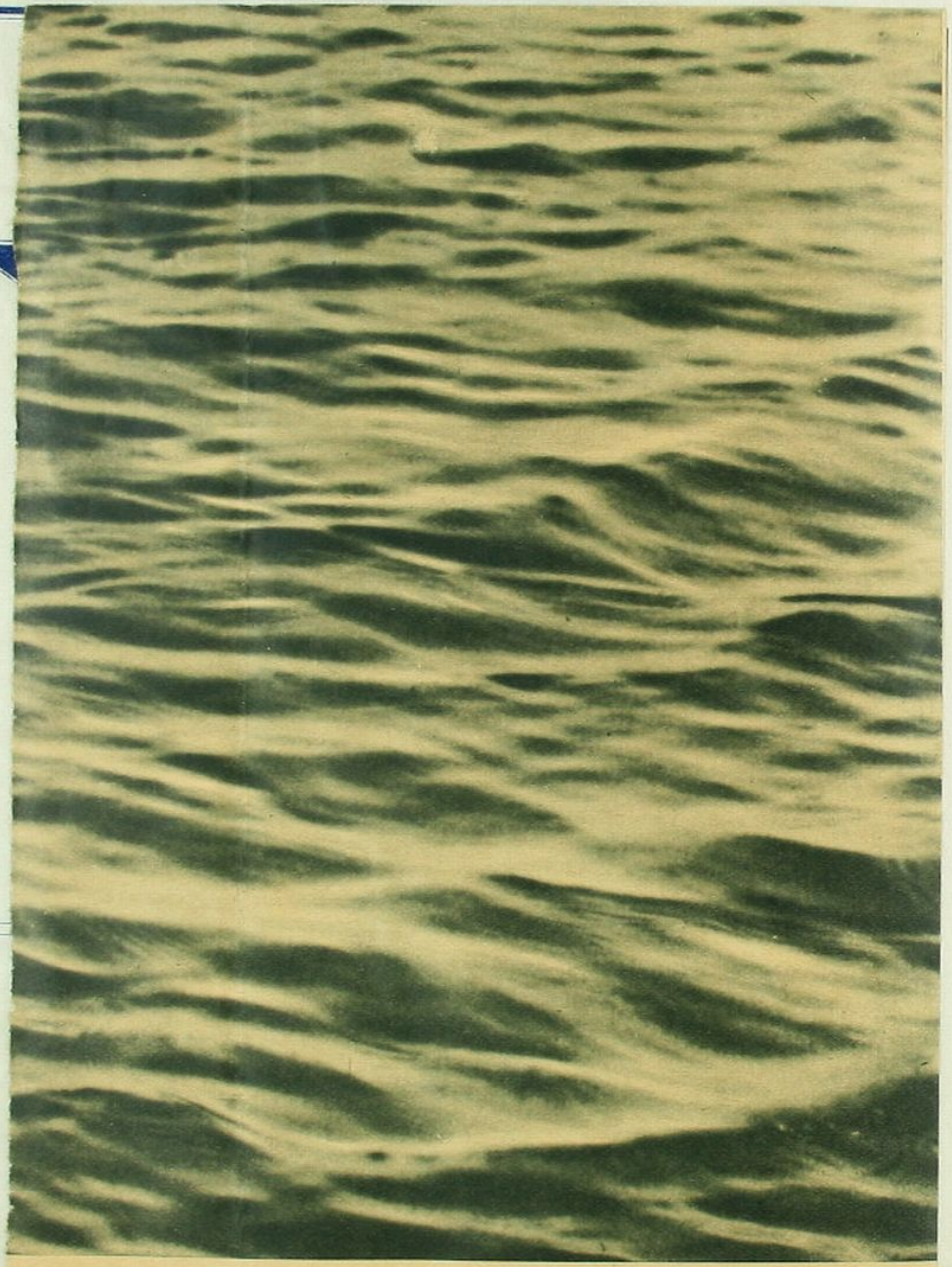
六 考古学派 (沼田頼輔等)

七 基癖分派 (石川文、在大久保、
 大久保、
 大久保、

字のものが揃列、最近を遊し多能があるのからひあ
る。

○東北地方の音がさういふ能難である、外回語にて
凡外交官の東北地方に多い、方言のさういふ岩手出身
の多う、林格助のなほ出身のさういふ、岩手のさういふ、松
村清七岩手心ある、休否、貴歴、松田操也共、凍鞋
のさういふ、小田切万壽の如く、山形のも、何んうとさうい
外交官のさういふ、音のさういふと云つる、東北のさういふの如
○北海道に出張する、好の滞在、中、漁業に就く、往きの
法をさへ、其境に、路んび、さういふ、法、の、日、の、こと、か
七、興味を感する、當時の、ノートから、聊、さういふ
書、の、中、に、採、録、する。

採録



風 涼

北海(北海)の鱧や鰻の大群が押寄せると、まんとかき
群来)と云ふ事がある。北時の海産物の或る部合の全魚
は換する、漁夫は魚をかくし、網を張つてあるから、或
中魚石の魚は逃げ終るから、一本捕獲が出来ると
突々痛状のよび、全体魚が群をとり、押寄せると
の放卵の為、狂乱とも云ふべきこと、また未
のだから、捕獲の容易である。小指迄は、大漁があ
つたが、積道が敷設さへしてから、無いので、江戸
の釣り、釣るういて来ると、いふ事、そのウツが狂
乱的の魚は、まんとかき、と云ふ、狂着するもの、
と云ふは、

北海の海産物の釣り、魚を捕獲する法、知つておるため



原始的な漁業の、漁業の、最も大切な魚は、
を安んずる、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
神おこと、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
ち、天日、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
七、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
つかぬ、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
別、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
品物の、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
キの時、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
鱧、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
ら、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、
傾、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、魚は、

ハ脱葉ニ先づ一現象ハ、臨終の色と云ふべし、此七病
 びるくも喜ぶべし、此七病ハ、保し美の美
 である。紅ふしれ柑をささく、其時ニ庭ニ移し植え
 るひさしく、涼風の推移ハ変化を生ずるの地から
 美と美とすることハ差支ハあるまい。之を臨終の色
 として特ニ葉を掃ひ去るるも、或ハ洋人の
 日本庭園は、日本ハどこオカシク自然ニ従ハ主義ハ
 庭と心とあること、此れハ、しんり守りてゐる日
 ハ、其洋人のまゝあり、西洋の美とするハ、自然を
 するに在り、即ち庭園に之を用ゐること、金深けん
 ハ、其のまゝ植物を元客と新種と得んこと、
 取りとす、と、此れも、日本の材料の選擇ハ限



ん其氣の窮乏ハ、親のあり、いつとも國を
 の行旅を株守せん、ことハ、葉の比法のみ、いけん
 新種をわづらひ、庭園のまゝ植ふん、さやハ、其地ハ
 陽子研定すん、と、此れハ、大捨の標準ハ、必
 一七、此と曰一と、と得ん、
 の大切の要件とする日本ハ、概ハ、新種
 のみと食つる花室の如き親とす、其の日本ハ、
 園日、此の行、此の所ハ、其ハ、自然と撰取ト
 取捨セぬ、此、と、此、日本庭園ハ、美
 あり、特ニ、此、



フランスからお返しの人形
 毎年クリスマスになると、少年赤十字團主催の世界お人形展覧會が各國で開催される。昨年はパリ、今年はブダペスト——パリへは我國からも七組送られ、花の都で大陽采、その御返禮が十六日赤十字本社へ届いた
 やはりフランスの少年少女達が一生懸命になつて作った可愛いお人形さん達だ、東洋趣味を發揮して麥草製の菅笠帽子をチョイと頭に澄し返つたのが六つ——
 ブダペスト展へ送られる日本人形も各地から集まつて来た、不安の歐洲でもこの人形展覧會だけは和やかな光を興へよう「寫眞左の六つが佛國製、右はブダペスト行の人形」

藤原製

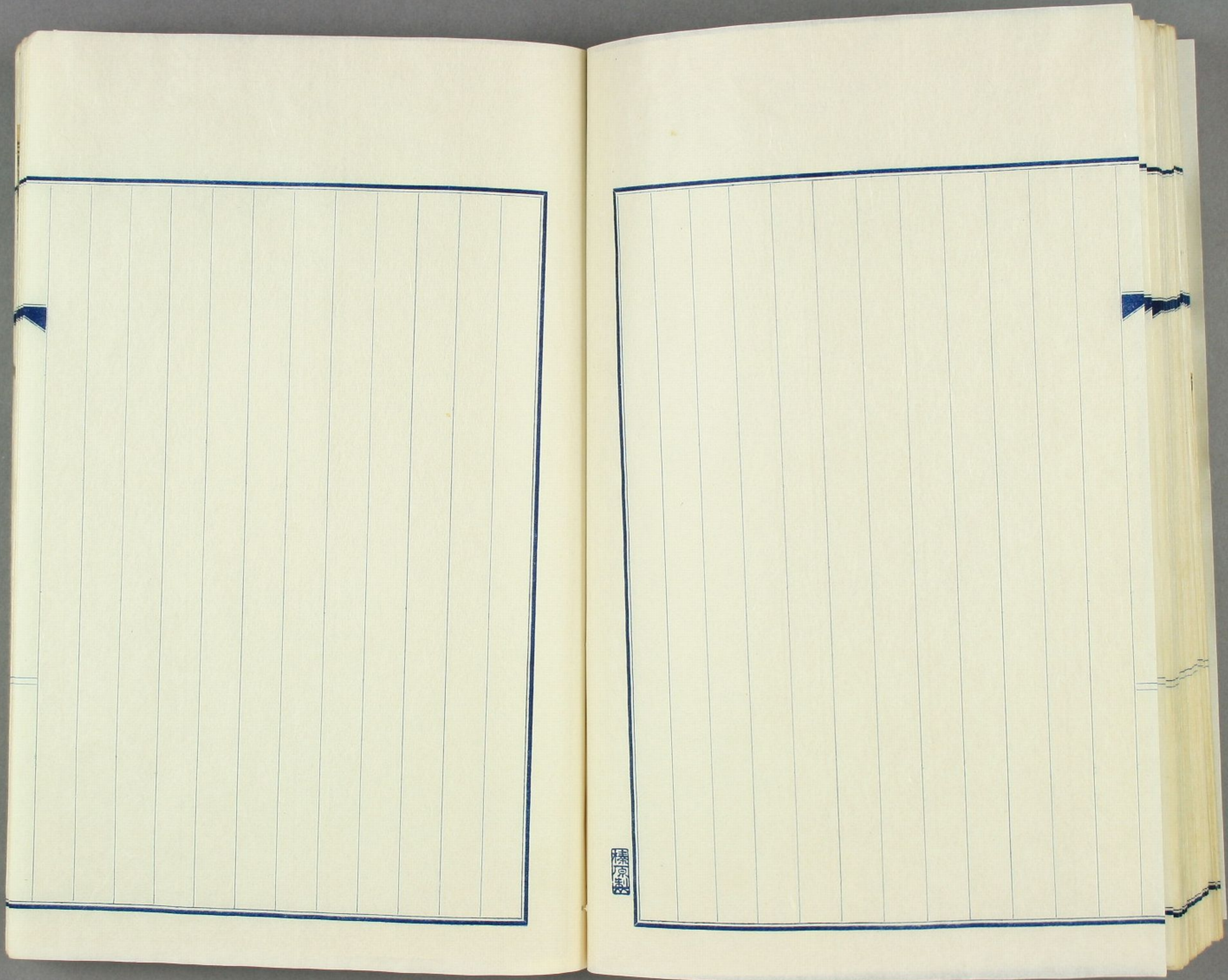
金々印の御座るの事。之より及しりたりたすを
私のくらしを少ししある様。こまごまを借する様
抄る付き、新様を得んことを勉むる抄る存じし
法局一と自らを割ちてししと自らを従つて
するにあらざるといふ事。其の事。其の事。其の事
の大方。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
因らるること。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
巡撫の区域を限ると而るるを。材料の豊
富なる事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事

東表

東表

此の材料の豊なるを。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
区域を廣くせざる。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
此の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
類を株守ること。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
か、唯、新様を。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
と。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
い。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
と。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
七。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事
其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事

か
う
伊
國
風
の
色
國
の
後
舟
の
式
の
的
一
と
樹
木
の
裁
切
の
因
錐
形
を
い
は
す
非
難
し
即
ち
英
國
の
遠
曲
を
経
路
と
有
し
植
込
の
如
の
一
概
し
ま
の
も
多
株
を
も
當
替
し
て
な
る
先
二
角
北
の
國
氣
を
い
は
す
外
國
人
と
い
は
す
い
く
ら
う
話
を
一
方
の
國
と
い
は
す



Small vertical stamp or mark on the left page, possibly a date or page number.

以下
4丁
白紙

新報

編輯人 中西政市
發行所 書境新報社
東京市牛込區早稲田町四〇
電話東京二四七五二番
定額 一月五元
半年三十元
一年六十元
廣告(九ポイント)
料(一行五十錢)

江戸の草分
御料筆司

筆慶雲堂
東京・深川・高橋一ノ三
電話本所六三三三番
振替東京 三三九番

目錄呈

於て十分想像することが出来る。だからと言つて、その困難な道に分け入らないといふ理由はない。今や、焦眉の急と迫つてゐるその必要さは絶對的のものなるが故に、その絶對の前には、さうした困難など、自らにして解消すべきものとの確

和紙の話

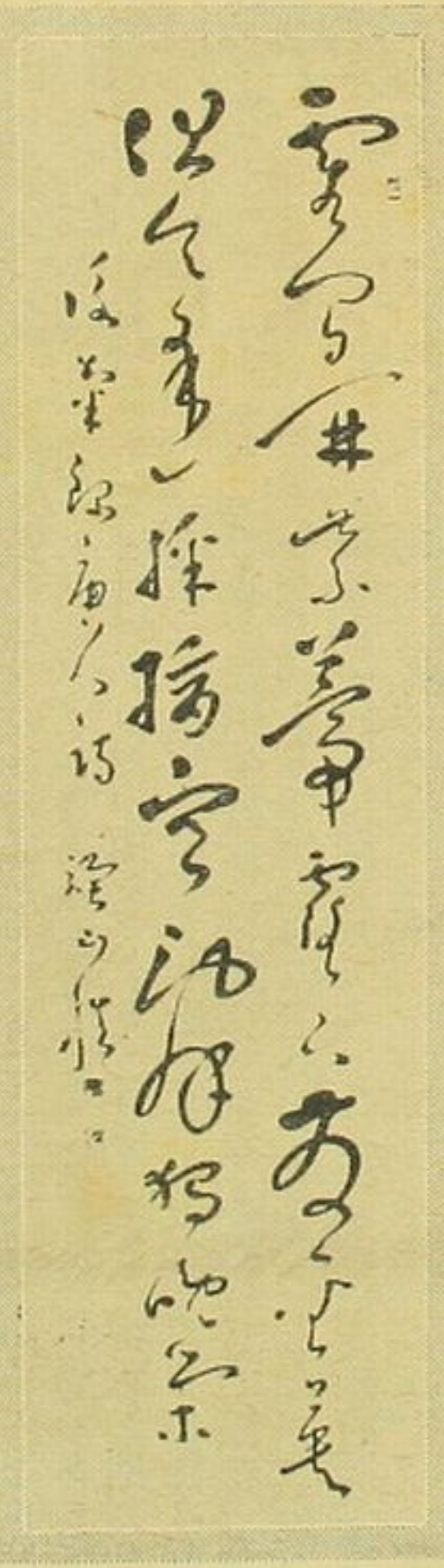
赤堀又次郎

東洋の紙は、支那に於て後漢時代に發明されたと傳はつてゐる。その製法が朝鮮を経て、我國へ傳はつたのは、推古天皇の十八年三月で、高麗僧曇徴の力によるものである。これは國史に明文のあるところである。尤も、その現品は、それよりもずつと早くから來てゐる。最初の事はわからぬが、王仁が傳へた論語千字文なども、紙に書いてあつたものと思はれる。

澁き方についてみるに、麻楮などのものは竹の糞を用ゐ、がんびを原料とするものは糞を用ゐず紗を使つてゐる。糞を用ゐたものは其目が存し、左右上下伸縮の度が異なるから、印刷用としては適しない。もし刷書が紗澁きで出來ると、印刷用に最も妙である。

半折

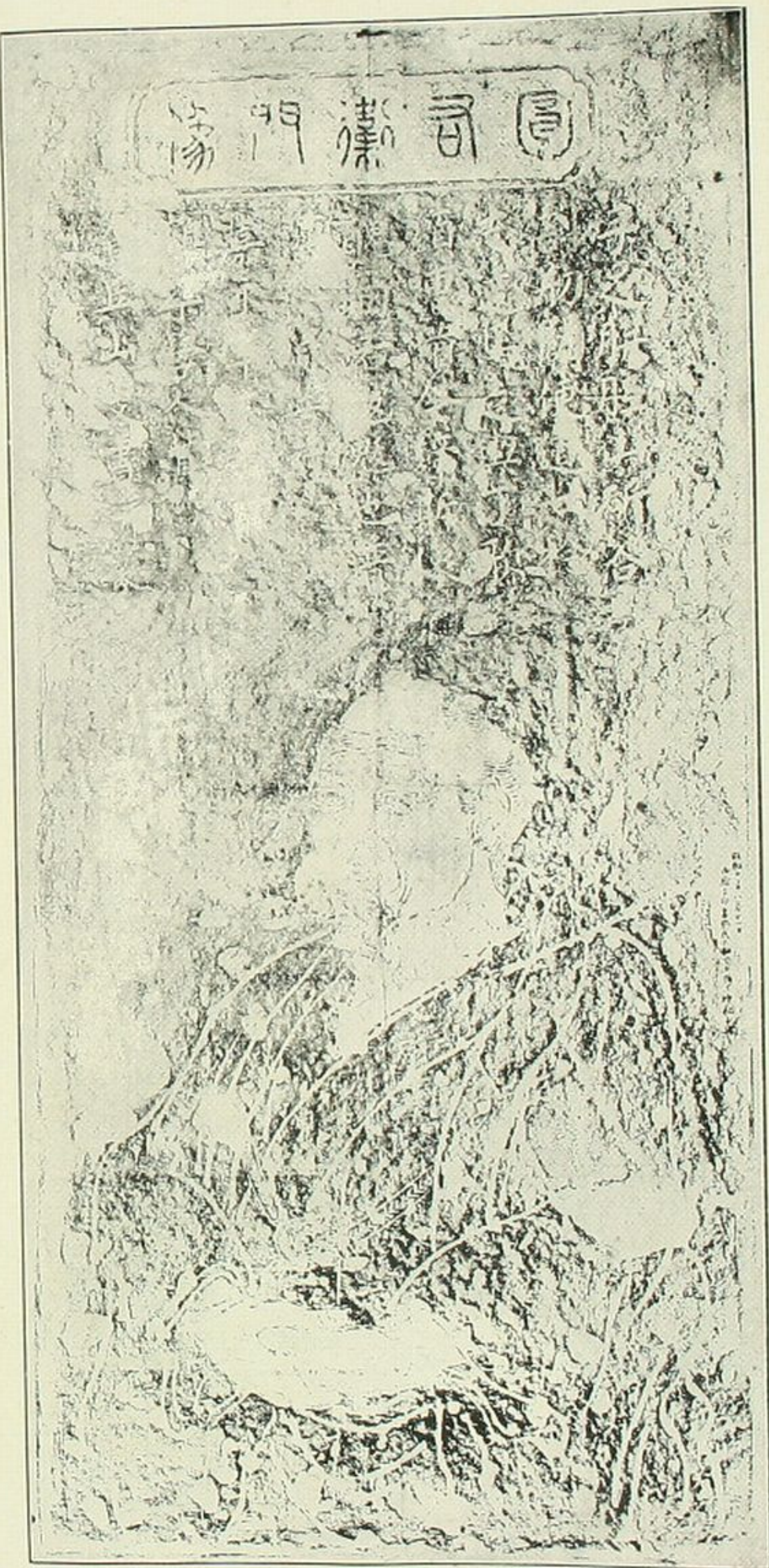
川村驥山氏



その原料について言ふと麻と楮とがانبの三つが最も多い。楮紙は一名みちのく紙と云つて、陸奥の産であつたが、何を原料としたかは明らかでない。今の楮紙は楮を用ゐてゐる。三叉を原料とすることも古いやうであるが、之を盛に用ゐるによつて良質の紙を製するやうになつたのは近年の事である。近頃はマニラの麻が盛に用ゐられる。これらの原料に更に土其他を混じることはすでに奈良朝に行はれてゐた。

傳へてから、どんな風で各ることで知られてゐる。鳥の子紙は、常陸の鳥の子といふ産地の名によつて大矢田命といふ人が傳へたと思はれる。其居所が大矢田村で、夫を後に祀つたのが大矢田神社である。中世これに牛頭天皇を合祀して紙の用途は極めて多い。

雪村は、下野の那須で、特殊の紙をすかせた由である。近年では雅邦紙といふものも出來た。秦東紙といふものもあるよし、こんなことどもを數へあげたら切りがない。



今年も八月の半月を甲州御嶽で過した。「山静如太古」とか「山中無暦日」とか言ふ語がしみじみと味はれる、村中の人が知り合つてゐるので、私にとつては住み良い村だ。
御嶽に滞在する毎に、絶えず思ふのは、長田圓右衛

門のことである。

我々が今かうして容易に昇仙峽谿谷の勝景を賞することの出来るのは、實に圓右工門の努力の賜ものである。

昇仙峽の絶勝「覺圓峰」の程近くに、圓右工門氏の像を刻んだ碑が建つてゐる。繪は某山人とあるが椿椿山の筆であるさうな、賛は林鶴梁の作る所である。

圓右衛門像賛

手足胼胝。山斫谷割。創關便道。甘稔志達。
馬走輿丁。歌頌嘈囂。今諦斯像。醜面若魃。
雖則若魃。心肖菩薩。

右の賛によると廿年近くの時を費して昇仙峽を開拓したのである。

近來此地を探勝する者が激増した。而して探勝者はこの碑の前をどうしても通るのである。しかし、この碑に氣の附く者は甚だ稀であり、この像を見てこの賛を讀みその功績を稱へる者は更に稀であり、これより稍先に眠る圓右衛門の墓を拂ふ者は愈々稀であらう。この碑の左側に小副碑が刻まれてをり、文は山本節

氏の撰で書は成島治平氏の手になるもの、成嶋治平氏は御嶽研究家として著名の士である。この副碑によると、圓右衛門像碑は附近の路傍に倒れてゐたのを大正八年に現在の所に移して建てたことが分る。

現在の碑は、自然石を刻んで、そこへ舊碑をはめこんであるが、自然石が後方にねてゐるので、碑面もねてゐるのである。その爲に附近の岩石の飛來がある度に破損するらしく新しいきすが見えてゐる、これをまづ直ぐに直せば千年ももうし、このまゝでおいてはもの百年も保つまいと思ふ、縣としては何とか出来ぬものであらうか。

甲州の昇仙峽と訪ひし
ことあるも此碑の氣
竹のてし 根郡の旅
るりのは日をし 陽の

長田製

(日一十月三年五廿治明)
可認物便郵蓋三第

東京朝日新聞

昭和十年九月十三日
號外

【本紙不再録】

人行設刷印像報國
聞 報 本 國
所 行 發
區 町 總 市 京 東
地 番 三 日 丁 二 町 榮 有
社 團 新 日 朝 京 東

今朝新發田町〔新潟縣〕の大火

— 本社機上より撮影 —

内野機關士
長友操縦士



ひ具さに惨禍の状況を
目撃、機上より警報を播散した
る後一時東京に向ひ午前十一時十
分洲崎に降り着く警報を機下して
羽田に着陸した長友機士、内野
機士は交々機上より観た



大火の惨状を語る
新田の上空に飛んで行くと、
もう町は三分の一は焼けて居り

に燃せつけてゐたが風がひどい
ので寄りつけず手を拱けて燃え
るにまかせてゐる有様であつた
なほ各隣接地から疾走して来た
自動車トラックなども町端れに
止つて動けず荷物なども空地に
少しは持ち出されてゐたが大體
丸焼けであると思ふ

町役場必死に 避難民の救済

全小學校は休校す

【新田電】六時餘りに起つて一瞬の間に大炎も軍艦、消防隊の一必死の努力で九時三十分漸く収火

町別には取替す小戸を二は相違にある模様である

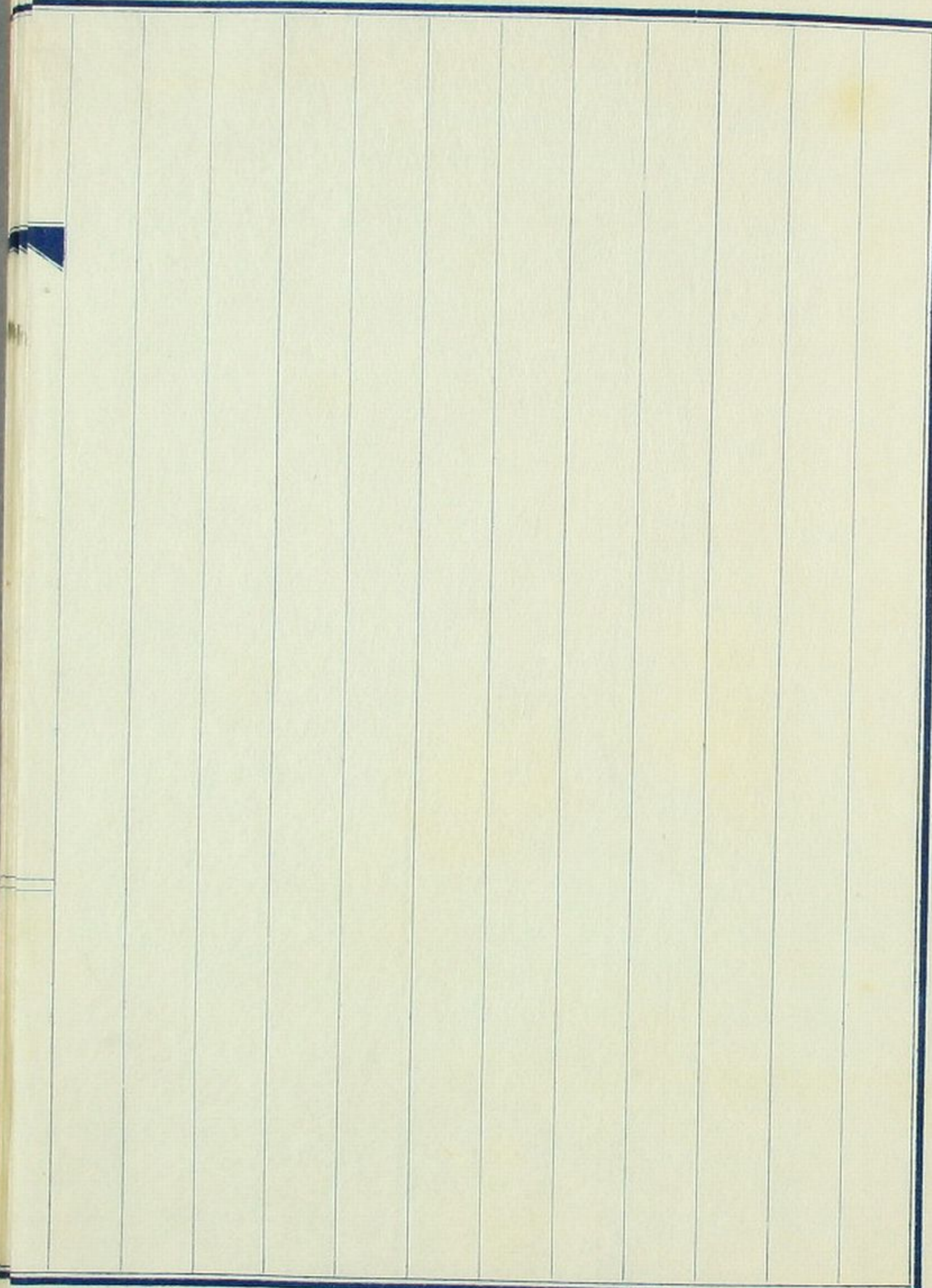
町別の焼失戸數

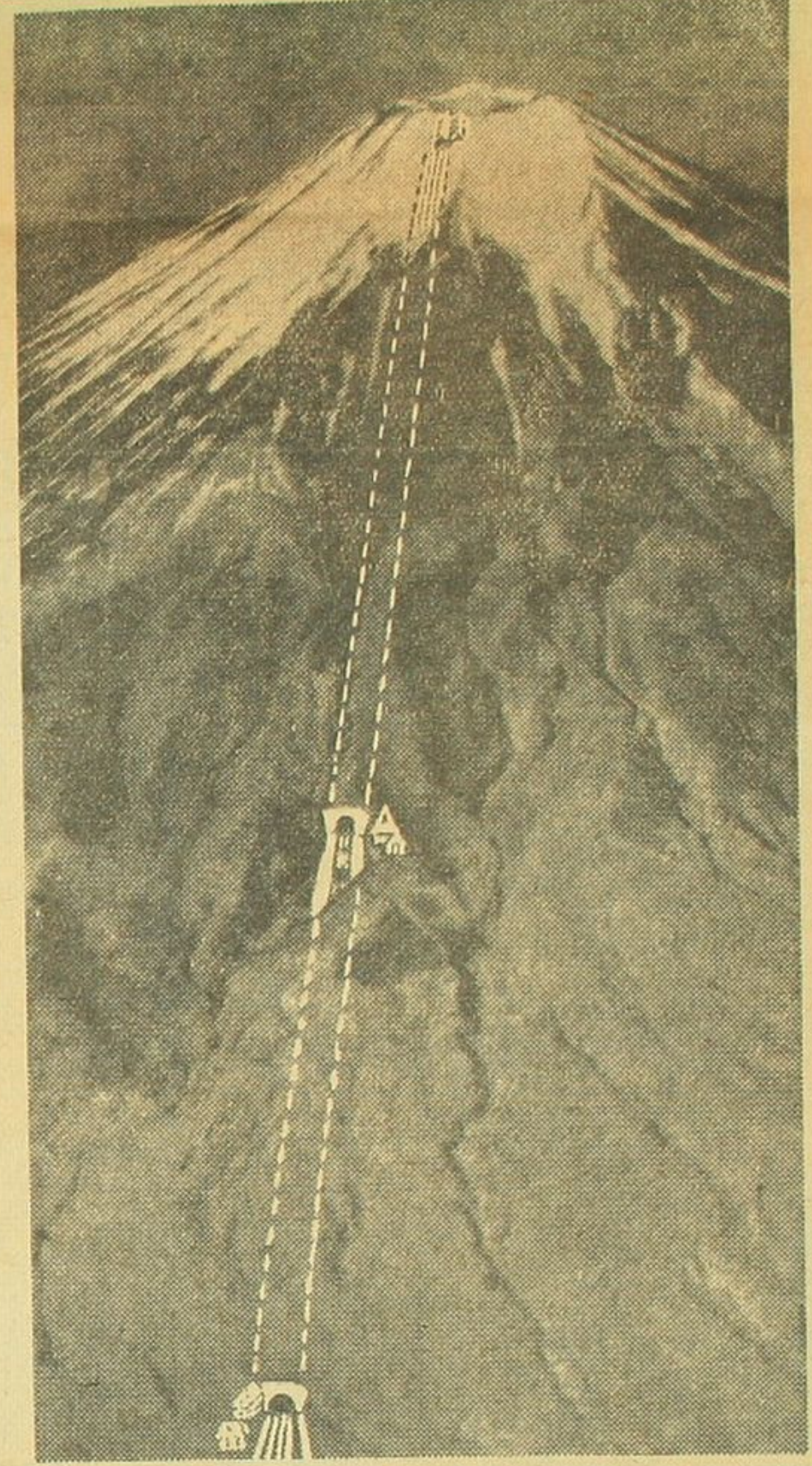
新田町大火の焼失戸數町別は左の通り

- 西新田町五十二戸、新田町七十戸、片田町二十五戸、西輪町八十一戸、徳町九十四戸、徳倉町百一戸、廣小路三十八戸、新道五十九戸、尾上町五戸、豊町七十七戸、小人町五十三戸、同心町四十戸、馬場町四十八戸、竹町五十九戸、下町九十五戸、中町三十四戸、上町百五十戸

憲兵分隊全焼

新田憲兵分隊及び官舎は十三日早朝全焼した旨東京憲兵隊へ入電





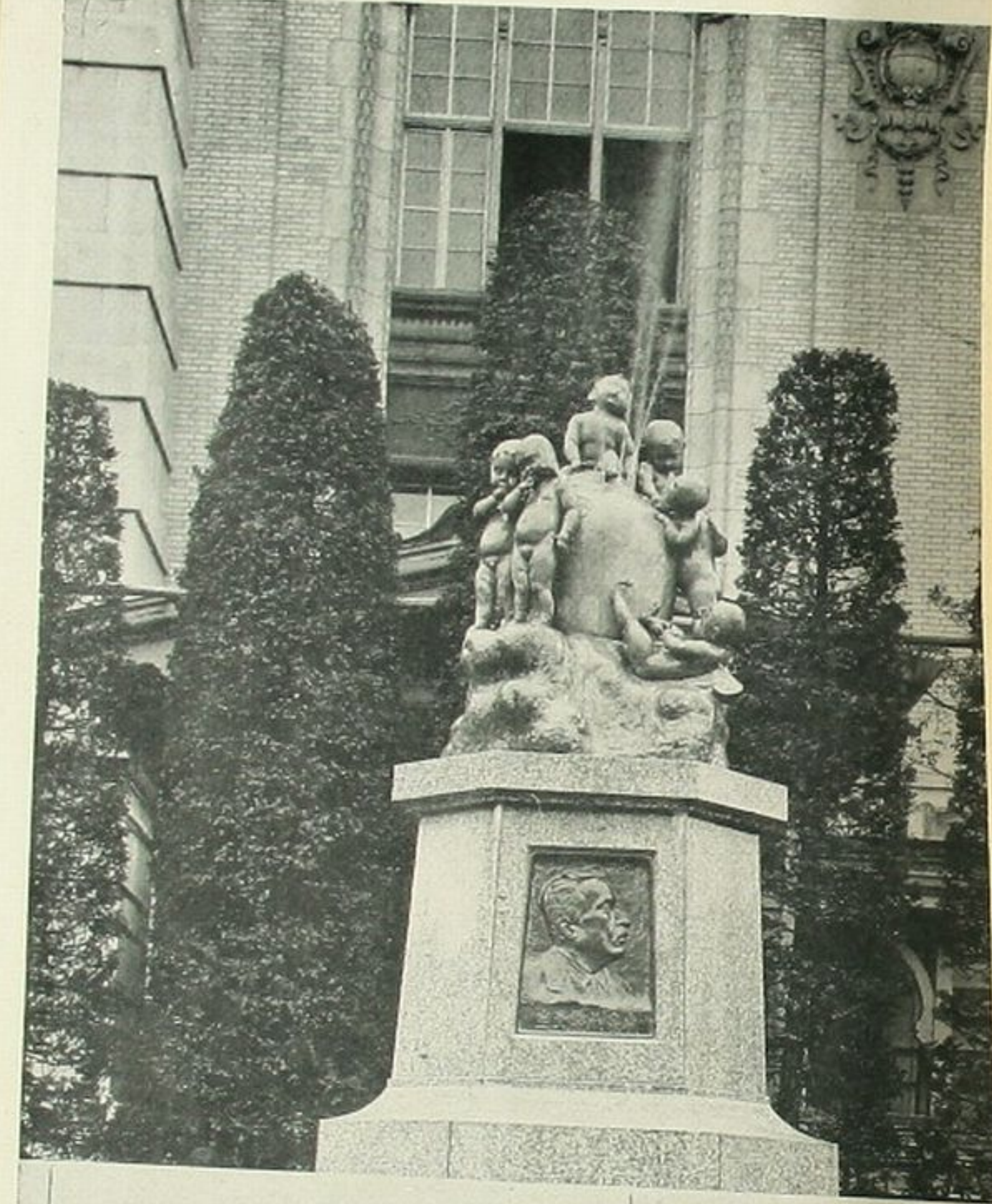
富士山特急征頂

モグラ式ケーブルカー計画 麓から僅か四十分

超流線型

「大規模な計画は、山麓にすかして登る。富士山。その富士山の裾野に大穴をあけ山頂まで索道をつくり登山者は坐ったまま山頂まで運ばれるといふ大ケーブルカー敷設が計画されその敷設許可証はすでに計画者から山梨縣廳を経て近く鐵道省に提出される、このケーブルカーは現在一般登山家が一日がかりで登る行程六キロ半を僅か四十分で山頂まで運送するといふのだからまさに超流線型のケーブルカーである」(計画は計画の決定圖)

小泉八雲記念碑



(前館書園國帝野上)

この快速

ケーブルカーの出願者は元貴族院議員で兩國ビル内貴金屋山崎吉氏でその計画によると起點は山梨縣の吉田口、ここから富士山の裾野に入口の大穴をあけ地面から四十メートル位を離れて地面と大體並行に山麓から山頂まで直徑十六メートル位のコンクリート隧道を造りケーブルカーを敷設する、線路は單線所々で車のすれ違ふのでその場所だけは隧道の直徑を三十メートルにする、地下に潜つたまま山頂まで達するのは、余りに興がな過ぎるしそれ

現在山頂

までの六キロ半を引つ張り上げるだけの長さのワイヤーもないので五合目の山腹に大穴を明け、ここに乘換所を造るこの五合目を天地壑と稱し絶景の絶といはれてゐるので、途中で下車させ觀光気分を満喫させようとの仕組みである、更に山頂迄運ぶわけだが山麓から山頂までの所要時間が大したスピードも出さず四十分位だといふ、車は一台八十人乗りの流線型を使用する像定だが乗車費は一人往復五圓位の見當でこの工事費はザツと五百萬圓に上ることであるがケーブルカーの外に五合目にはまつばりした觀光ホテルを建て更に

頂上には

石室のホテルをつくるさうである。この計画に對し内務省は富士山は國立公園の指定地であり風致保存の見地から富士山の裾野に大穴を明けたケーブルカーを通させるのは感心せぬといつて

るのでこの計畫の成行は注目されてゐる

地下を潜つて風致は害さぬ

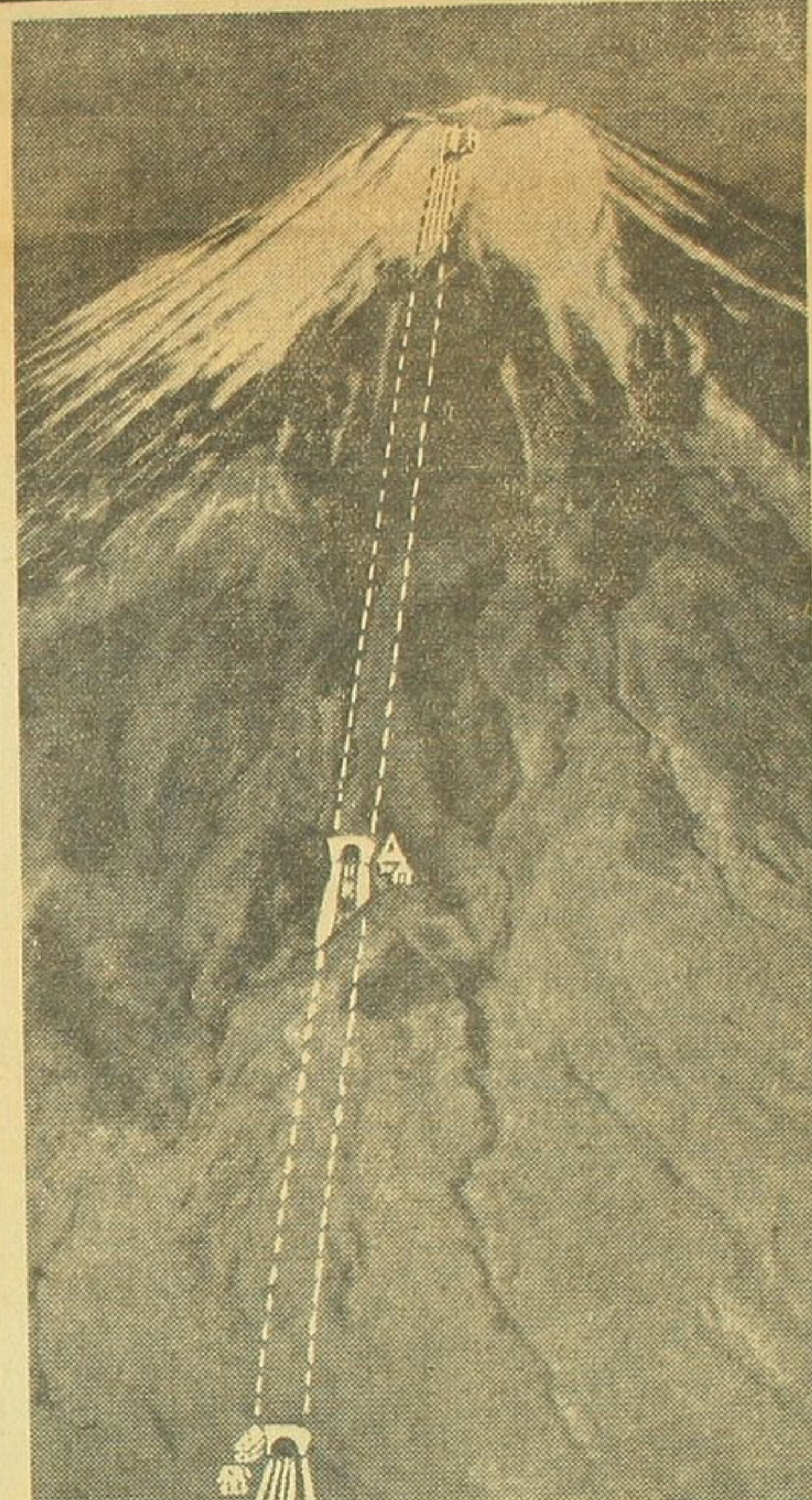
出願者の談

出願者山崎吉氏は語る富士山には出来るだけ女や子供も登れる様にして山頂から下界を見せるべきだ、又外人も日本に来ると大體富士山をたづねるが滞在期間の短かいものは登りたくても登れない状態である、そこで此ケーブルカー敷設を計畫したわけだが、これが出来ると觀光客のためばかりでなく現在苦心してゐる山頂の學術研究等にも貢獻すると思ふ、總工費は五百萬圓位の豫定だが吉田口から登山するものが毎年十萬人を下らぬといふことだから算盤は十分採れると思つてゐる、富士山が國立公園指定地であり大穴を明けてケーブルカーを敷設すると風致を害する恐れがあるとの意見もある様だがそのために地下を潜つてケーブルカーを通すので少しも風致を害することはないと思ふ、許可があれば直ちに事業に着手するつもりです

感心できぬ

内務省の見解

内務省衛生局では懸念そんな話には聞いたがまだ計畫の内容が十分わからぬ、しかし富士山は世界にまで知られてゐる日本の名山でありむしろ國民の信仰的靈廟といつて良い位であるから富士山は矢張り六根清淨を唱へ難陀に汗を流しけりながら登り山の靈氣によれて心氣を清浄にするといふことが最も長く富士山の裾野に大穴を明けたケーブルカーを敷設してスラスタと登ることは感心出来ぬ、又國立公園の見地からもその計畫に賛成出来ぬ



富士山特急征頂

モグラ式ケーブルカー計画 麓から僅か四十分

超一流線型

「大根浦」を指へ思板にすがつて登る富士山。その富士山の麓に大穴をあけ山頂まで直道をつくり登山者は半つたままで山頂まで運ばれるといふ大ケーブルカー敷設が計画されその敷設許可証はすでに計画者から山梨縣を經て近く鐵道省に提出される、このケーブルカーは現在一般登山客が一日かりで登る行程六キロ半を僅四十分位で山頂まで登降させるといふのだからまさに超一流線型のケーブルカーである【客價は計畫の豫定額】

この快速

ケーブルカーの出願者は元貴族院議員で兩國ビル内貴金屬商山崎吉氏でその計畫によると起點は山梨縣の吉田口、こゝから富士山の横腹に入口の大穴をあけ地面から四十メートル位を離れて地面と大體並行に山麓から山頂まで直徑十六メートル位のコンクリート隧道を造りケーブルカーを敷設する、線路は單線所々で車のすれ違ふのでその場所だけは隧道の直徑を三十メートル位にする、地下に潜つたまです山頂まで達するのは、余りに興がな過ぎるしそれ

現在山頂

までの六キロ半を引つ張り上げるだけの長さのワイヤーもないので五合目の山腹に大穴を明け、こゝに乘換所を造るこの五合目を天地境と稱し絶景の地といはれてゐるので、途中で下車をさせ觀光客を驚嘆させよとの仕組みである、更に山頂迄運ぶわけだが山麓から山頂までの所要時間が大したスピードも出さずに四十分位だといふ、車は一部八千人乗りの流線型を使用する豫定だが客車價は一往復五圓位の見當でこの總工費はザツと五百萬圓に上るとのことであるがケーブルカーの外に五合目にはさつぱりした觀光ホテルを建て更に

頂上には

石室のホテルをつくるさうである。この計畫に對し内務省は富士山は國立公園の指定地であり風致保存の見地から富士山の横腹に大穴を明けたらケーブルカーを通させるのは感心せぬといつて

るのでこの計畫の成行は注目されてゐる。

地下を潜つて風致は害さぬ

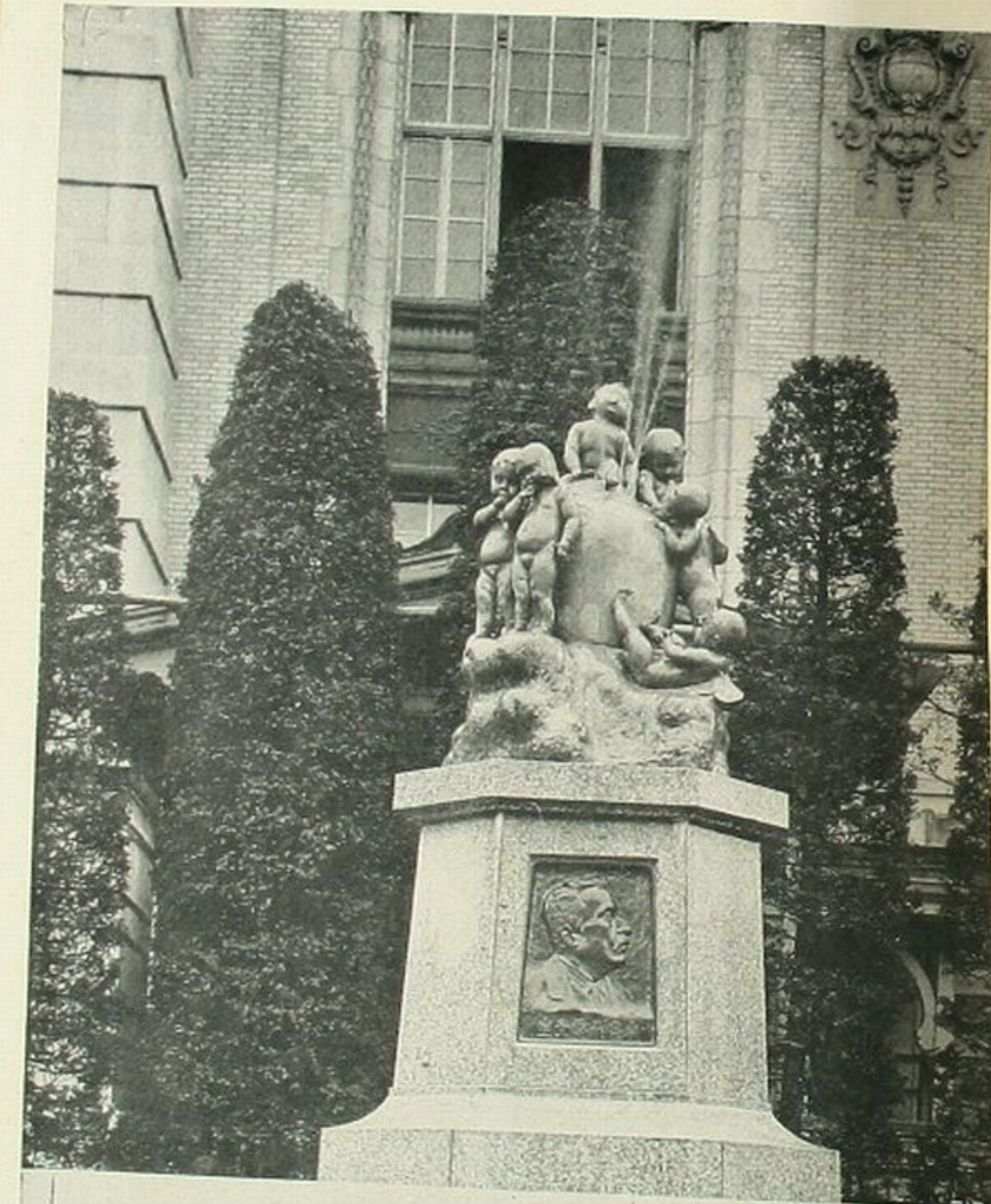
出願者の談

出願者山崎吉氏は語る。富士山には出来るだけ女子供も登れる様にして山頂から下界を見せるべきだ、又外人も日本に来ると大體富士山をたづねるが滞在期間の短いものは登りたくても登れない状態である、そこで此ケーブルカー敷設を計畫したわけだが、これが出来ると觀光客のためばかりでなく現在苦心してゐる山頂の學術研究等にも貢獻すると思ふ、總工費は五百萬圓位の豫定だが吉田口から登山するものが毎年十萬人を下らぬといふことだから算盤は十分採れると思つてゐる、富士山が國立公園指定地であり大穴を明けてケーブルカーを敷設すると風致を害する恐れがあるとの意見もある様だがそのために地下を潜つてケーブルカーを通すので少しも風致を害することはないと思ふ、許可があれば直ちに事業に着手するつもりです。

感心できぬ内務省の見解

内務省衛生局では語る。そんな話は聞いたがまだ計畫の内容が十分わからぬ、しかし富士山は世界にまで知られてゐる日本の名山でありむしろ國民の國民的榮譽といつて良い位であるから富士山は矢張り大根浦を指へ懸崖に汗を流しりながら登り山頂の雄気にふれて心氣を清淨にするといふことが最も良く富士山の横腹に大穴を明けたらケーブルカーを敷設してストラスタと登ることは感心出来ぬ、又國立公園の見地からもその計畫に賛成出来ぬ。

小泉八雲記念碑



(前館書圖國帝野上)

おの念々とい健勝、安ん度けり、り此
小生儀と唯手来面白クレアリ、昔後モア
日月ヲ送り貴重、人命、夥ク失ヒ例ノ
常方面ダケハ片付キ中モ是ヲ如進、多
明ヨリ行勤おぬ、ノ中、方体ハ至極強健
乍候ハ安意ノ下、扱ハ玉弟、儀、付
毎、以配意ノ下、疑有テ多餘ヲ、何人儀
昨夜一子ヲ失ヒ小生、息息、兩人、戦死お
遂ゲケモ、ツキ、男系統滅、玉、次弟コレテ
格別差障、
来ダ者、ボレ、
出来、
小生一代、
統ダケ、
就而家産、
妹及、
踐シ先祖、
有、
お加、
お洵、

おお念々とい健勝、安ん度けり、り此
 小生儀、唯手来面白クレ、り、苦後モ、
 日月ヲ送リ、貴重、人命、夥ク失ヒ、
 常方面、タケハ片付キ、中モ是ヲ、如進、
 明日、行勤、おぬ、ノ、中、方、体、ハ、至極、
 乍、便、ハ、安、意、
 毎、
 昨夜、一子ヲ失ヒ、小生、息、息、
 遂、
 格別、差障、
 未、
 出来、
 小生、
 統、
 就、
 妹、
 踐、
 有、
 お、
 お、
 先、
 時、
 了、

市典お

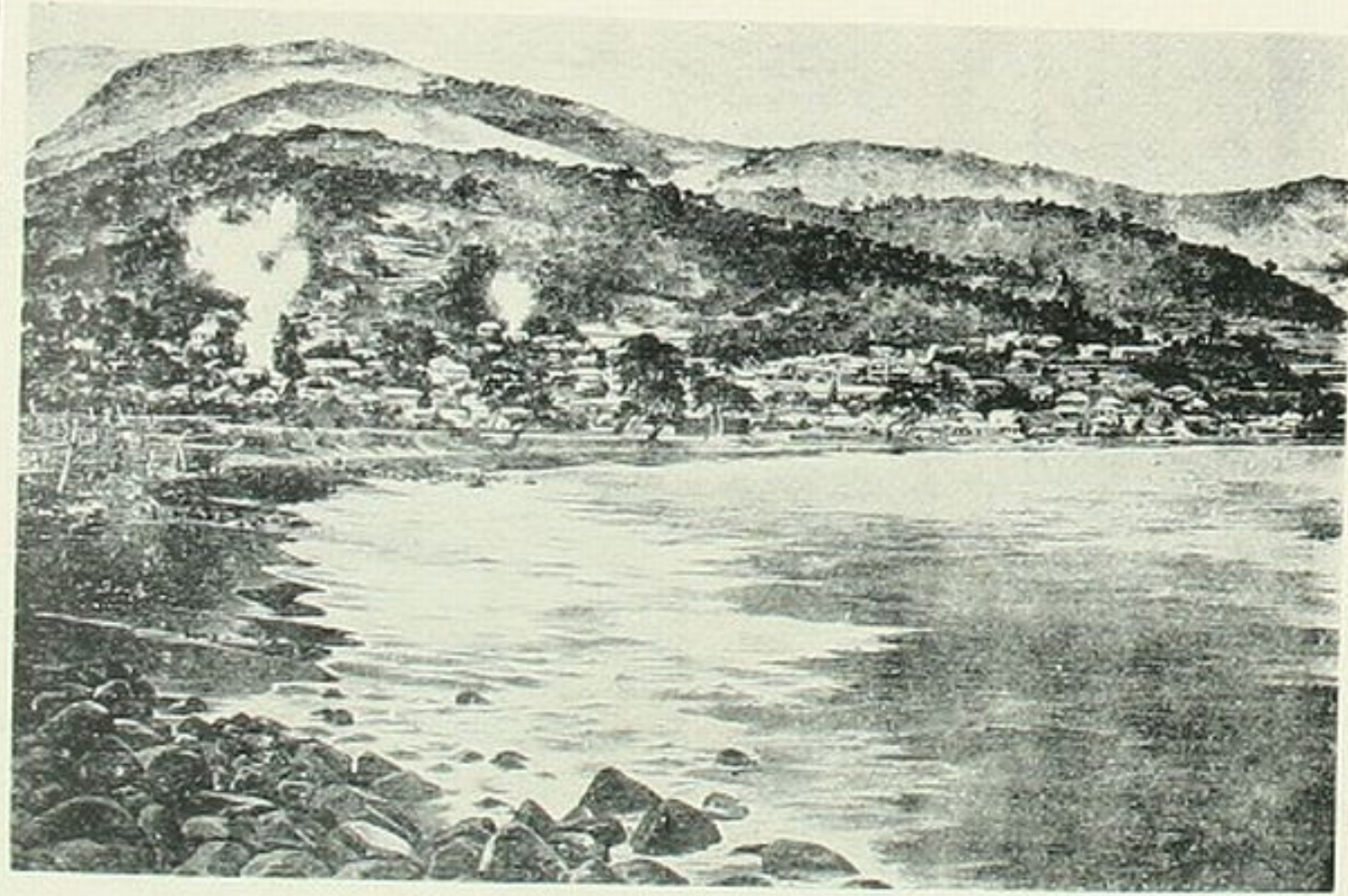
桂賢見

こゝろ

熱海温泉と
成島柳北先生

の思出のために

熱海聚樂館主
加藤清二郎編



明治時代の熱海風景

先ハ以テ法政ニ
時下折角以テ自愛ス之ニ
了月ニテ

希典
ね

桂賢光

三三三

此の用紙は純實手スキ書簡紙でペン毛筆両用の「最近の製紙です」

日出づる國ビンセン附録第二百四十二

熱海と柳北

市島 春城

明治の草創、熱海の靈泉がまだ廣く世間に知られなかつた時、詩に文に類りに宣傳したのは成島柳北翁であつた。翁の筆は人を魅するの妙があつて、當時交通不便の熱海へ多くの都人士を誘ひ、其頃まだ大學の學生たりし吾等迄惹きつけられたが、坪内君と自分は學生客の第一號であつたらう。

柳北翁の常に泊つた旅舎は今の聚樂で、庭園は尙舊面目を存し、其庭が眺望絶佳の丘陵に在るので、翁が氣象萬千を樓名に撰んだのは偶然でない。自分年來の宿も亦此樓で、嘗て坪内君と庭園を歩しなから翁を追憶し、熱海を今日の如く繁榮に導いた大恩人は柳北翁であるに、何事ぞ此地に翁を記念する何物も無い。セメて此庭園に小碑を建て、碑面にあの長顔を刻してはどうかと、互ひに語つたこともあるが、其事成らず坪内君も亦世を去つた。

偶々本年二月我等同人が聚樂に會した折、上陳の事が話題に上り、一同此舉を可とし、聚樂主人も亦熱心實行を諾し、今は着々其事の運びつゝあることを聞くのは吾等同人の喜びに堪へないところである。



成島柳北翁當時の停留所を存する聚樂園



成島柳北先生小傳

柳北先生は幕府奥儒者の家柄に生れた。

天保八年二月、成島稼堂の子として生を享け、幼にして俊敏、學問を好み詩文を能くした。若冠十八歳にして家を嗣ぎ、將軍家定及家茂二公の侍講となり、また幕命をうけて東岳が著す所の東照宮實記五百餘卷を訂正した。

然し柳北は尋常一様の儒者ではなかつた。能く時勢を知り夙くも西洋の學術の益あるを見てその説を

主張するので、やゝもすれば上長にさからひ、また戯詩を作つて幕吏の因循を嘲つたので遂に職を免ぜられてしまつた。

そこで暫く家に閉ぢ籠つて西洋の學問を研究してゐたが、慶應元年に至り、幕府が兵制を改革した際に再び柳北先生は擢んでられ、騎兵頭となつた。藤二千石。更に騎兵奉行となり大いに活躍したのである。

柳北先生は好學の家を生れたが、また能く兵を談じ武術も亦すぐれてゐた。馬を御して江戸市中を馳け廻つた時、先生の長顔を見た町人の戯作者が「これはさて世は逆さまになりけり。乗つた人より馬は丸顔」と唄つたといふ笑話がある。

騎兵奉行より、更に外國奉行となり、尋で會計副總裁に進み、屢々時弊を痛論して要路に建白したが容れられず、遂に屏居して東叡山に引きこもつた。その時薩長の組織する官軍が長驅して品川に迫つた。柳北は恭順論に抗して立ち奮然として「自分は徳川家累世の臣である、君を殺して罪を謝すこと、公等之を忍ぶも予は斷じてできぬ」と言つたが、事の到底支ゆ可からざるを知つて、遂に骸骨を乞ひ決然として民間に降つてしまつた。明治元年のことである。

ある。

その後一時學舎を淺草本願寺に設けて子弟を教育したが、明治五年歐米諸洲を漫遊し、歸つて向島墨水の花月幽靜なるを喜んで秋葉祠の傍に居を定め、酒盃に親み、書を讀み、優遊自適してゐた。

時に朝野新聞社の才學を惜んで社長として迎えたので先生は欣然「以て我が熱腸を吐くべし」と言つて就任した。(明治七年)それより日々論説を發表すること數百篇、筆頭神あり、墨端鬼あり、忽ちにして笑ひ、忽にして怒り、心想千態、奇想百出して眞に人をして驚倒せしめ、爲めに朝野新聞の名聲は嘖々として天下に噪しき有様であつた。

かくして明治十七年十一月卅日病んで墨水のほとりに歿したが年四十八であつた。

柳北先生の號はその昔父祖の家が柳原の北に在つたからで明治に入つてから名を避けて成島弘と言つた。その面貌長くして三尺と言はれ、人に接して城府を設けず、酒を飲むに聲妓なければ樂まず、また意外にも古錢蒐集の趣味家であり、研究家であつて、西洋の古錢數百枚を齎して之を同好の士に頒ち、利を得れば柳橋で一夕にして擲つなど、悠々自

適一枝筆を以て海内を傾動し、高爵厚俸もその節を枉げなかつたのである。

多く墨水のほとりに住み、また屢々伊豆熱海温泉に遊び、當時あまり人に知られなかつた熱海温泉をその靈筆をもつて天下に紹介したものであつた。

著はす所、明治新撰泉譜、古錢鑑識訓蒙、柳北詩鈔、温泉紀行、航西日乘、航微日誌、戲著は乃ち新柳情譜、京猫一斑、柳橋新誌等がある。(坂口風柯生撰)

熱海のうた

初島

柳北

うら／＼とほふ朝日を幌にうけて
初島かくれ小舟數見ゆ

熱海新年

あさ日影さすがに年の立といへば
旅寝ながらも嬉しかりける
蟹の子か袖もかすみにいりとりて
錦かうらにとしはたちけり

洗愁日乗

成島柳北

上代の人は多く旅を憂きものに思ひ、一日一夜にても、我が住む郷を離るゝを、鳥流しにても遣ふ如く、嘆き哀みしは、憐れにも、又愚かなることそかし。
慈鎮和尚の歌に「旅の空に月見る夜半の思ひこそ秋の心の限りなりけり」と、秋の心は即ち愁也、客中に月を見るは愁悶の極點なりと爲す、其の比の情懷さも有る可きなれと頗る吾人の撰に異なり。吾人は都府の風塵中に月を看んよりは寧ろ他郷靜幽の境に於てするを得意とす、況や靈泉の混々として、以て平日の愁悶を一洗する勝地をや、然れども古人皆羈旅を以て憂き事と爲せば漁史も姑く愁思有て之を靈泉に洗ふと思ひなして此の遊記に斯くは名つけぬ

八月廿日(明治十六年)早發、新橋第一次の嵐車に乗り、神奈川より馬車し、藤澤に午餐す、是の日天陰り風涼しく、時々細雨瀟々、旅行には最上等の天氣也。

馬馳車走人呼快、風不揚塵、雨不泥。官驛道々天未午。征輪已到大磯西。
小田原の片岡氏に達せしは二時三十分なり、直ちに車を走らすれば日暮には熱海に達すべきも、病夫例の如く馬車に揺り立てられて、大いに疲れ

着て後入道後時雷雨指之指

東窓暮暮秋意甚狂狂地晚音

如天世之如 昔後茶 柳北

柳北先生書

(石塚松頼氏藏)

たれば、斷念して、茲に宿せり。
八月二十一日 快晴暑氣強し、是れ亦眞の氣候に復せしなれば、決して苦情を鳴らすべからず。

早起小田原を發し、十時吉濱に午飯し二時熱海に達す。

此地は何故か漁史の性に適し、途上遠

く此の村落を望めば、既に精神の爽快なるを覺ゆ、况や自今遊客少なく、危樓高閣唯た我が撰ふ所にして、冬春の際衆客室を争ふの時と異なるをや。魚蔬も随つて廉なれば漁史も亦貧を嘆ぜず。樓に坐臥し事務の忙はしき無く、應酬の煩しき無き、其の心の爽快實に比倫無きを。是れにて暑熱に苦しむ者は狂人のみ。夜も蚊雷を聞かず、蚊嘯は釣れども萬一を防ぐに過ぎず、故に漁史は盛夏も亦此地を樂むこと嚴冬の時に殊ならざるなり。都人士若し漁史の言を疑はば試に一遊して之を驗せよ。

うしと見る世に唯ひとつ樂しきは熱海のさとの湯あみなりけり

八月二十二日 晴、四顧雲翳を見ず、想ふに東京も好天氣なるべく、且つ秋熱頗る酷ならん。漁史の寓は山を負ひ、海に面したる熱海中第一の高樓なれば、綠樹涼しく、蟬聲秋を催して炎熱の何物たるを知らず。憾むらくは京城の朋友と此間に同遊せざるを。年々春首は浴場に知己の甚だ多きに過ぐるを覺ゆ今は復た寥々として、一個の語るべき人もなし。寓樓は意外に客多ければ宿帳を一閱したるに皆識らぬ人なり

風自南溪至。泉從北嶺流。其間着吾寓。獨占海山秋。熱海不知熱。逍遙眞樂鄉。振衣曉風爽。濯足暮潮涼。突兮崖上樓。是我所栖息。歌枕望滄溟。水天青似拭。

八月二十三日 晴、早涼に乘じ、小松君の山莊を訪ふ。前園も漸々に趣きを成し、眺觀は豁然として涼風衣袂を襲ふ、三伏も茲に在ては苦熱行を賦するに及はず、主人所藏の書畫數幅を品評して去る。九右翁松魚の新鮮なるを贈る。味極めて好し、此地暑天も春首に異なることは少なけれど唯た一の鬪典と謂ふ可きは市中に牛肉を嚙ぐ者なき是れなり。牛乳は毎朝發賣すれども牛肉店は全く廢業す、漁史僅かに罐詰の肉を以て滋養に供す。古の唐人が魚と熊掌と兩得し難きとか何とか言ひたりき。漁史も今魚と牛肉とに於て其一を欠くを嘆せんと欲す。噫熱海も未だ村の宇を下たすを免れざる乎。蓋し土人十の七八は猶牛を食はざる人種ならん。此の夜寝られぬまゝに

松風のたへまに雨のおとするは賤か算の清水なりけり (拔萃)

熱海の詩二 柳北

登日金山長歌

日金之勝天下開。偉觀超絕絕群山。群平生殊憾未相識。徒誦前輩好詩文。我已遊展誠函嶺。今日來踏此山頂。咄々山靈巧欺人。百道噴雲纏我腰。我怒一叱雲陣摧。十州五島眠中來。甲駿峯精豆相海。紫翠千里分明開。名山雖多皆幽翠。爭及此山活潑々。廬山之歌觀山碑。古人論評何喧聒。我提巨瓢注芳醇。滿酌忽發滿山春。唯恐天風飛餘瀝。醉倒十州五島人。

遊日金山

箕踞山嶺怪石頭。十州五島落雙眸。瓢中酒和飛雲飲。誰信人間有此遊。

初島

閩島無毛族。土人誰識貓航之。離二一葉。知與世間遙。

伊豆山

熱泉一道截雲開。直向懸崖瀉下來。浴法比他殊妙純。磯頭人坐老巖苔。遊客尋聲到。一條暖玉鳴。知他水雪

少。崖樹着新鶯。

明治甲遊伊豆山

暖氣和春一寰。不妨幽僻遠入間。橙黃隔屋映梅日。風景依然伊豆山。

熱海雜詠

知有名媛倚綺欄。曙天雪舞半峰風。看々地盡滿街白。剩得高樓殘燭紅。海南多暖雪華稀。珍重今朝撲蝶飛。一箇乞來呼一盞。獲了恰獲兔兒歸。

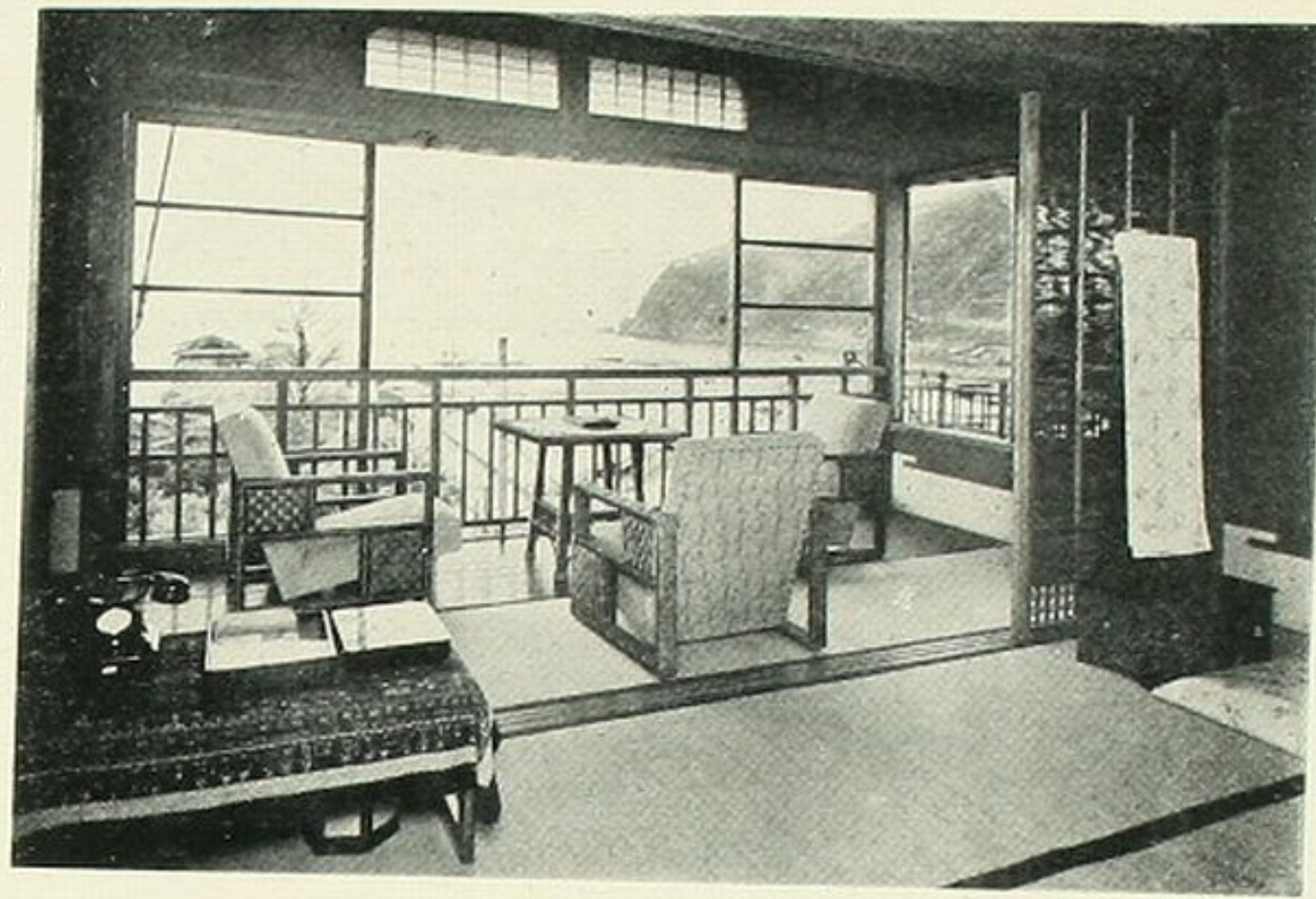
熱海客中之作

入港京船月五回。每聞笛笑頰開。家鄉寄我魚耶菜。新味知他上講來。聞說京城水雪多。東風吹到我梅麼。芳魂早返海南地。春末立前花候過。

熱海雜詠

海門明日雨耶晴。大鳥暖然初島明。爲是涼秋漁候近。家々結網太忙生。家々扑舞祝昇手。休道土風殊帝城。列館所迎皆貴客。閩村亦見乏窺張。醜春天地鶴泉湧。摸夜樓臺絃管鳴。誰使吾儂動鄉思。女兒掌底彩毬聲。

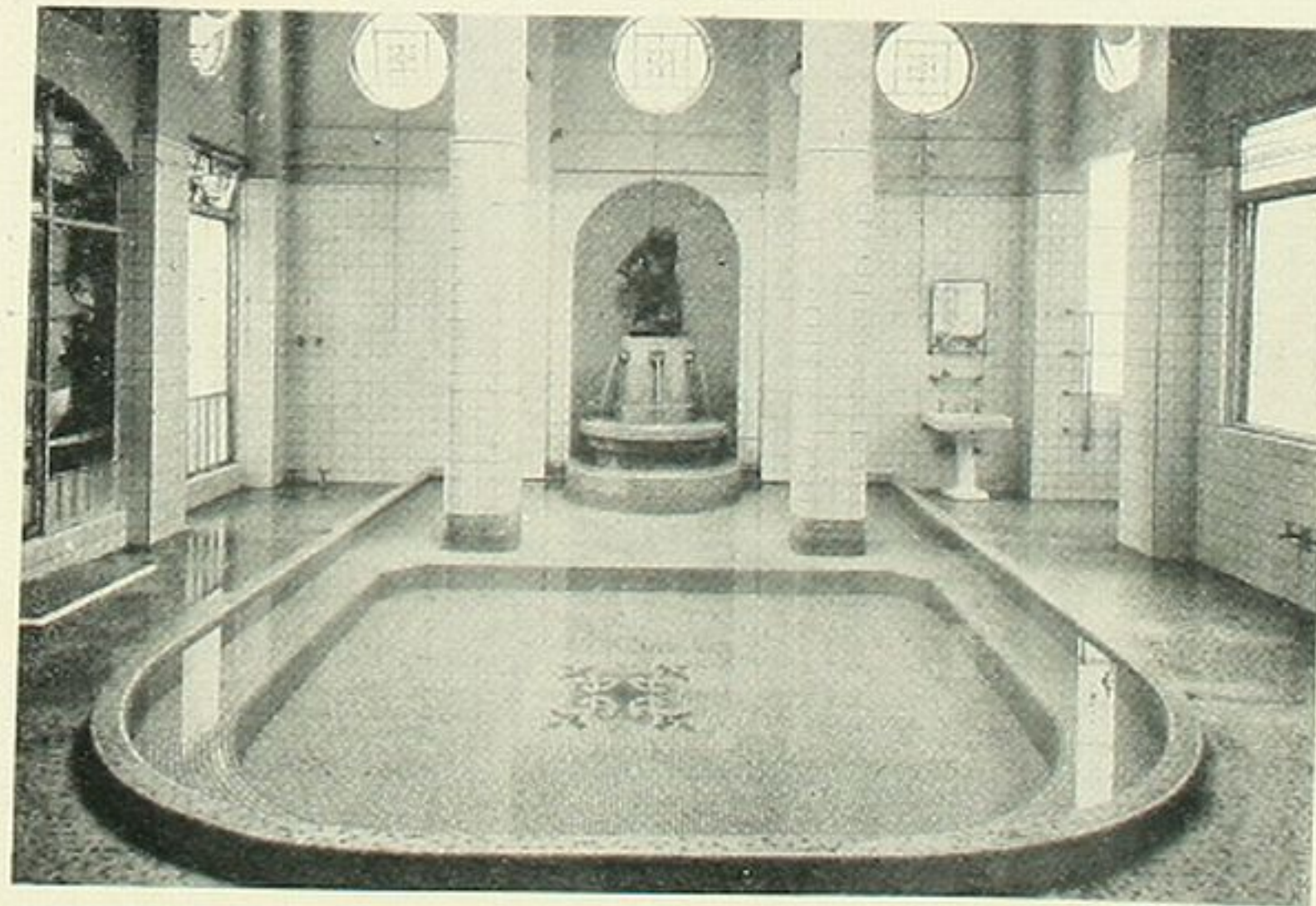
熱海 聚樂 客室の一部



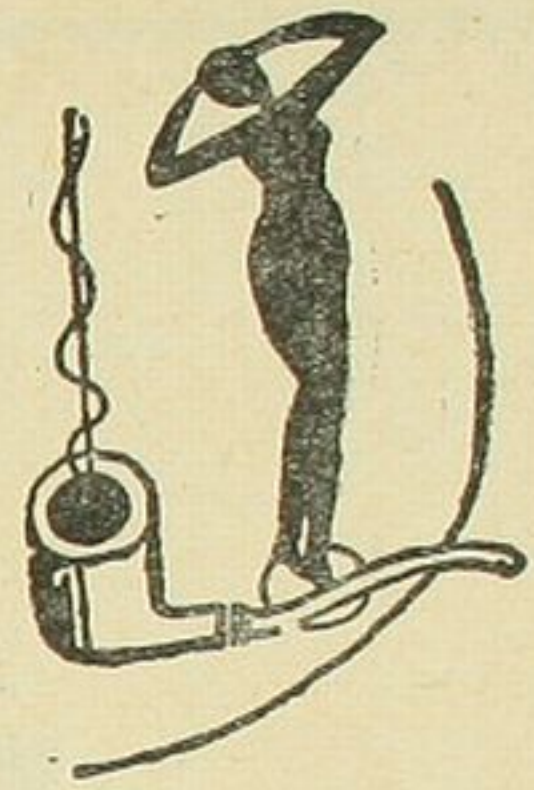
伊豆熱海町 温泉旅館 熱海聚樂

客室 五拾餘
茶代 拜辭・給仕料
電話 自一至三〇二番
割六九番

熱海 聚樂 大浴場



く此の村落を望めば、既に精神の爽快なるを覺ゆ、况や自今遊客少なく、危樓高閣唯た我が撰ふ所にして、



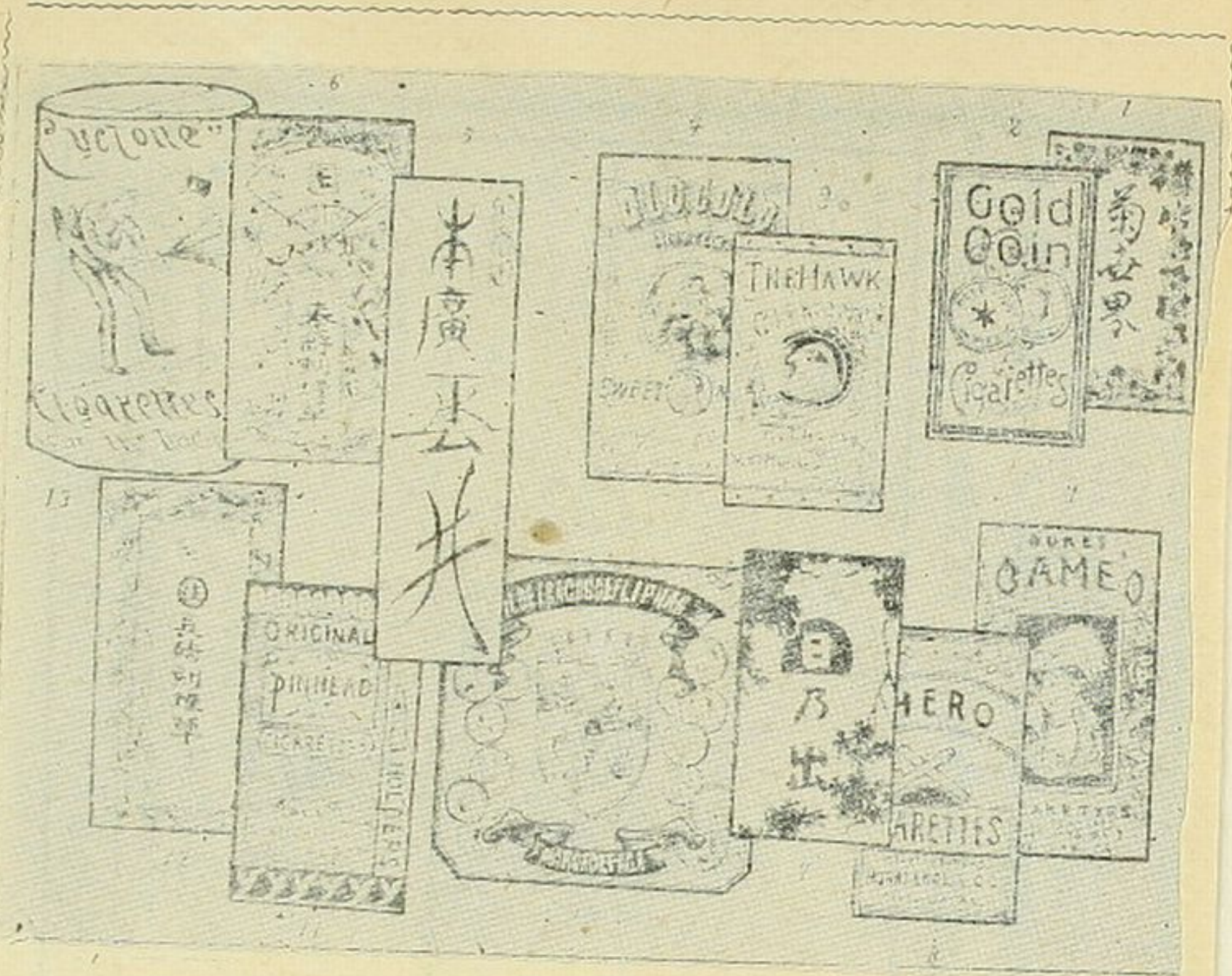
外國タバコ講話 (1)

東京地方專賣局
事業課

一、專賣法制定以前の外國煙草の輸入

明治初年の輸入煙草

我國では古來刻煙草ばかりで、紙卷や葉卷が流行つて來たのは、明治に入つてからこのかたのことである。明治維新以後、外國との交通が漸く盛になるにつれ、外人や、當時洋行歸りの新人達が、紙卷や、葉卷をもたらし來たのが、流行の魁となつて、次第に倣ふものが殖えて來た。この風潮につれて、必然的に我國でも、葉卷や紙卷を製造するものが相ついで出た。明治五年、東京麹町の土田安五郎が、紙卷煙草を製造したのが最初と云はれてゐるが、これは當時、丸善に輸入された帽子の包紙を鞘紙に代用してゐたといふから、商品として、一般に賣出すまでには至らなかつたかも知れない。明治十八年、千葉松兵衛の「牡丹煙草」が生れ、數年後、岩谷松平の「天狗印紙卷」が出來て、煙草の製造は、漸く企業化して來た。これ等の煙草は、何れも手卷用ライスペーパー付であつたことを注意せねばならぬ。當時一般の需要者は、刻煙草を巻紙で手製の紙卷煙草として、パイプで喫煙してゐたからである。これが實に紙卷煙草流行の先驅をなしたもので、その後需要者は、次第に手取早く

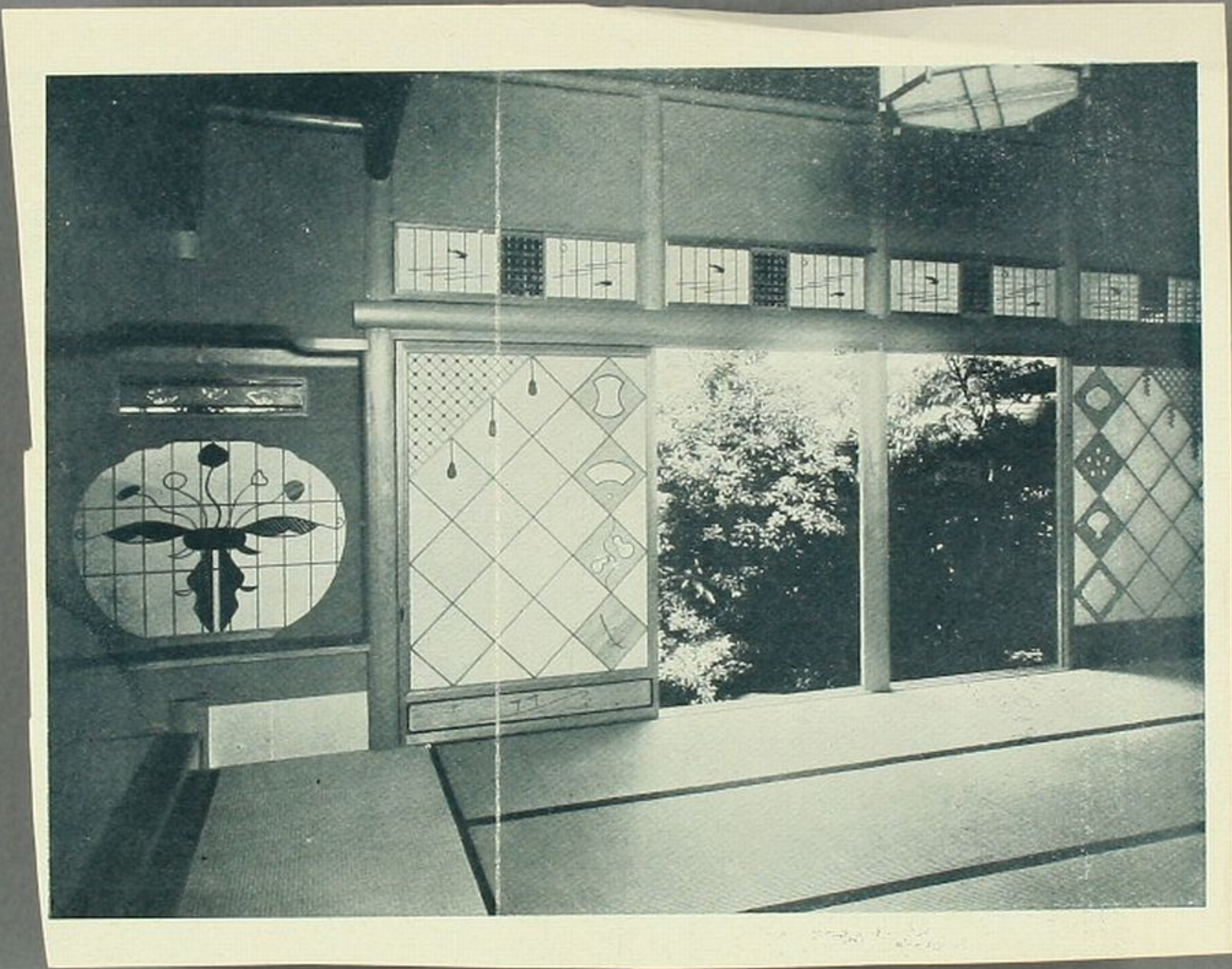


明治年間製造煙草一覽

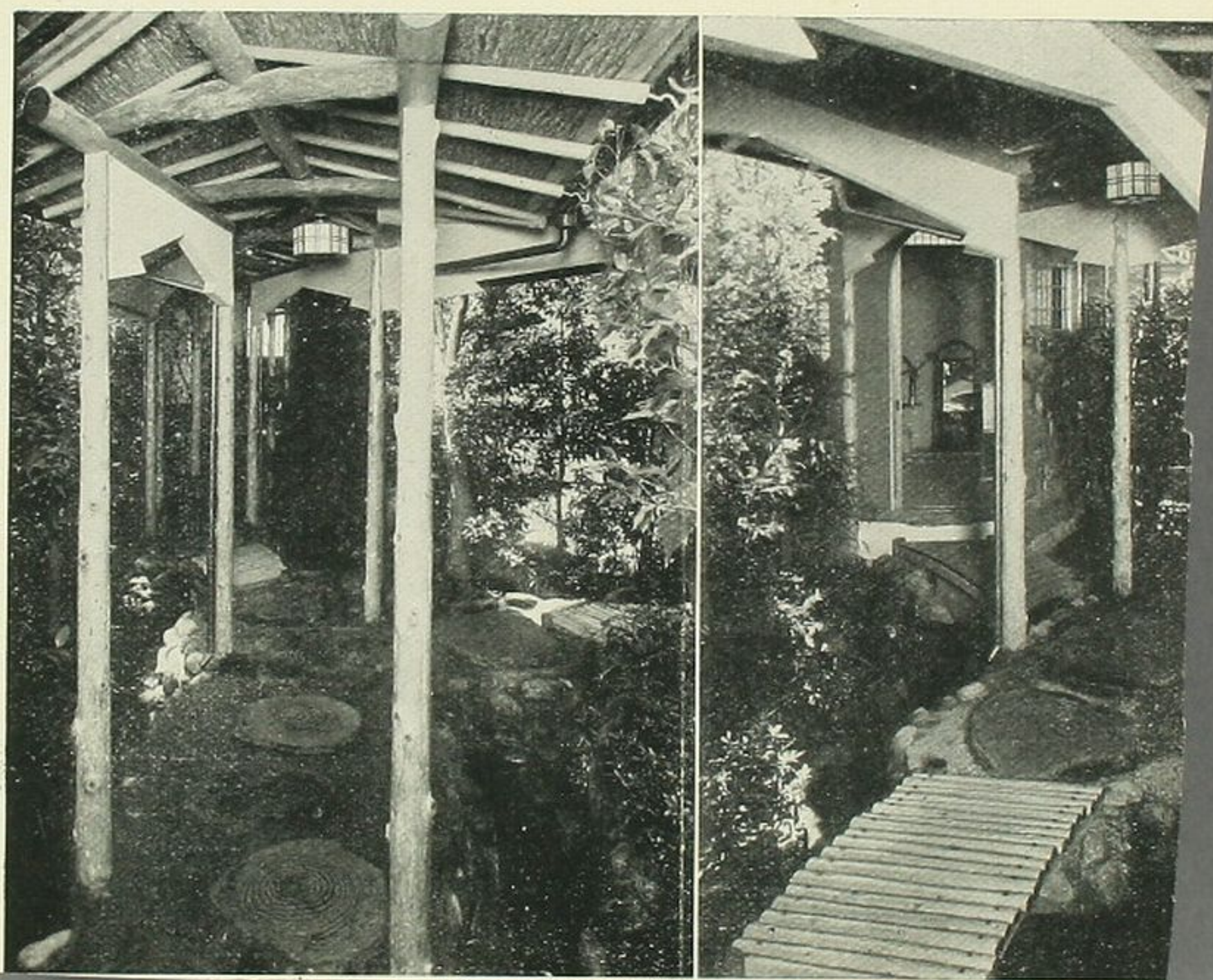
輕便な紙卷煙草に轉向して來た。

當時、外國煙草の輸入状態を見るに、明治十二年には、輸入原價、二千六百三十四圓であつたのが、二十六年には、既に二十五萬四千六百三十九圓といふ約十倍に達する激増振を示してゐる。輸入の大部分は米國製品で、當時我國に輸入されたものは、大體次のやうなものである。(次頁参照)

葉卷は、明治初年、九州阿蘇山下で、阿蘇商社といふのが製造したのを元祖といふ者もあるが、詳でない。唯、明治十二年頃、濠洲シドニーに開かれた萬國博覽會に、高千穂産原料の葉卷煙草が、長崎から出品された記録があるから、當時には、葉卷が製造されてゐたにちがひない。その後明治二十二年、東京の福田龜太郎がこの製造に従事したが商品として大いに賣出すまでには至らなかつた。葉



(左上) 中庭渡り廊下

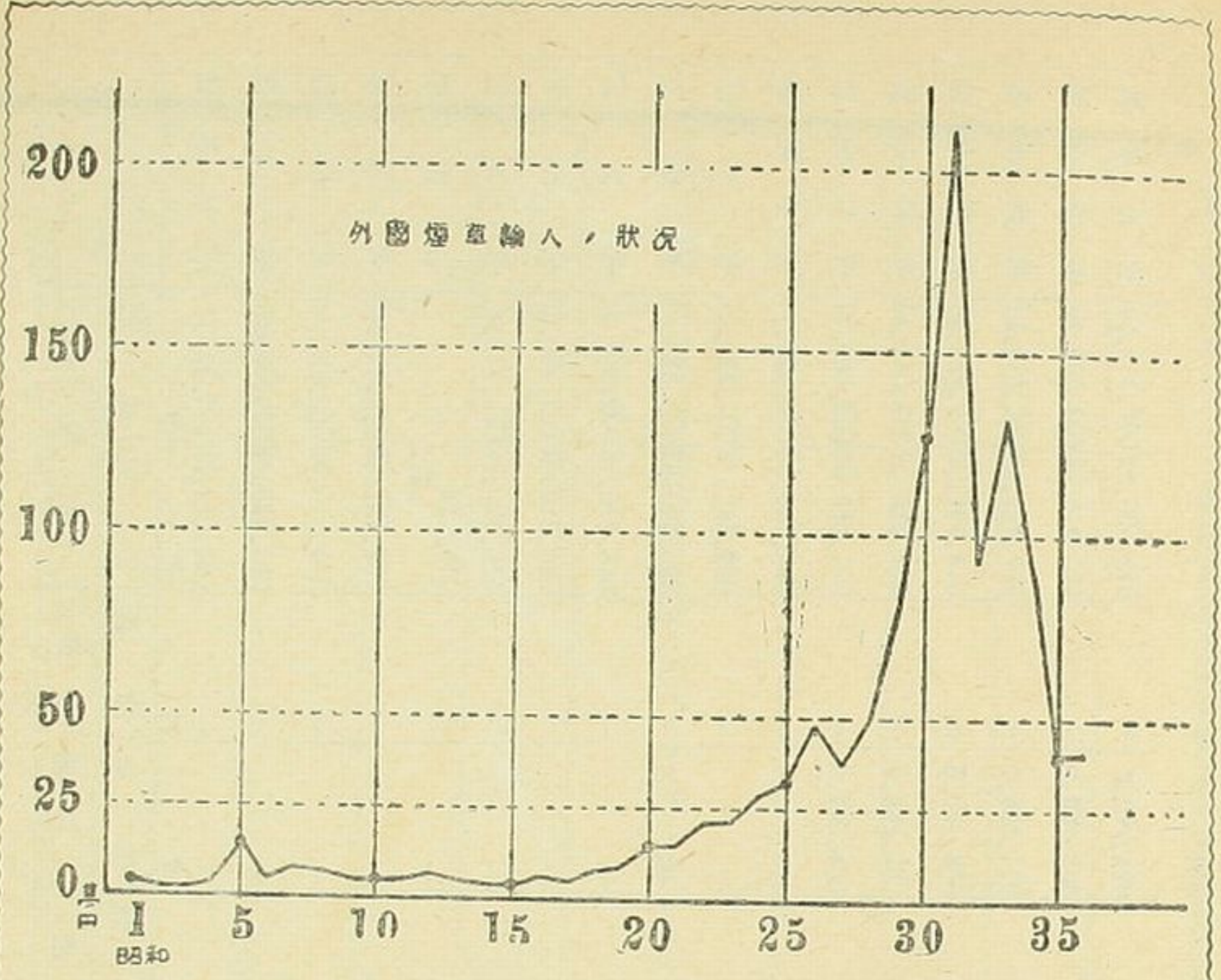


我民營煙草製造業の黄金時代を作り出したのである。當時の主な製品は次のやうなものである。

口付紙巻煙草	菊世界 (二十本入五錢)	千葉商店製
兩切紙巻煙草	ゴールド、コイン (十本入五錢?)	木村商店製
兩切紙巻煙草	ホーク (十本入三錢)	木村商店製
紙巻煙草	オールド、ゴールド (米國製、最初岩谷商會の手で一手販賣し、後紙巻煙草職が始つてから村井商會の手で販賣せられた)	
水戸の刻煙草	本廣雲井 (關東名物) (三十本二十五錢)	村井商會製
兩切紙巻煙草	ヒーロー (十本入三錢)	岩谷商會製
口付紙巻煙草	日の出 (二十本入五錢)	千葉商店製
同	白牡丹 (二十本入四錢)	村井商會製
同	廿世紀 (二十本入五錢)	
秦野刻煙草	(薩摩國府業を原料として製したもの)	
長崎刻煙草		

製品の輸入

明治三十七年七月一日は、煙草專賣法實施の日である。同日以後は、政府の外、煙草は絶対に輸入することは出来なくなつた。



今、明治三十六年までの輸入の状況を見ると、明治元年に四萬七千圓であつたのが、年を追うて漸増し、三十一年には二百十萬圓といふ老大な數字に上り、元年に較べると、實に五十二倍餘の激増である。しかし同年を最高潮として、翌三十二年には九十二萬九千圓に半減し、三十五年には三萬九千圓に急落したのは如何なる譯であらうか

當時の我煙草界は、實に一村井商會に負ふといつても過言ではなかつた。然るに、明治三十一年から、村井商會と、アメリカ煙草會社との合同が策せられ、翌三十二年には早くもそれが實現して新村井商會が成つた。この結果、従來、アメリカ煙草會社で製造してゐた「カメオ」「バトルアツキス」「ビンヘット」「オールドゴールド」等をも製造するやうになつたためである。

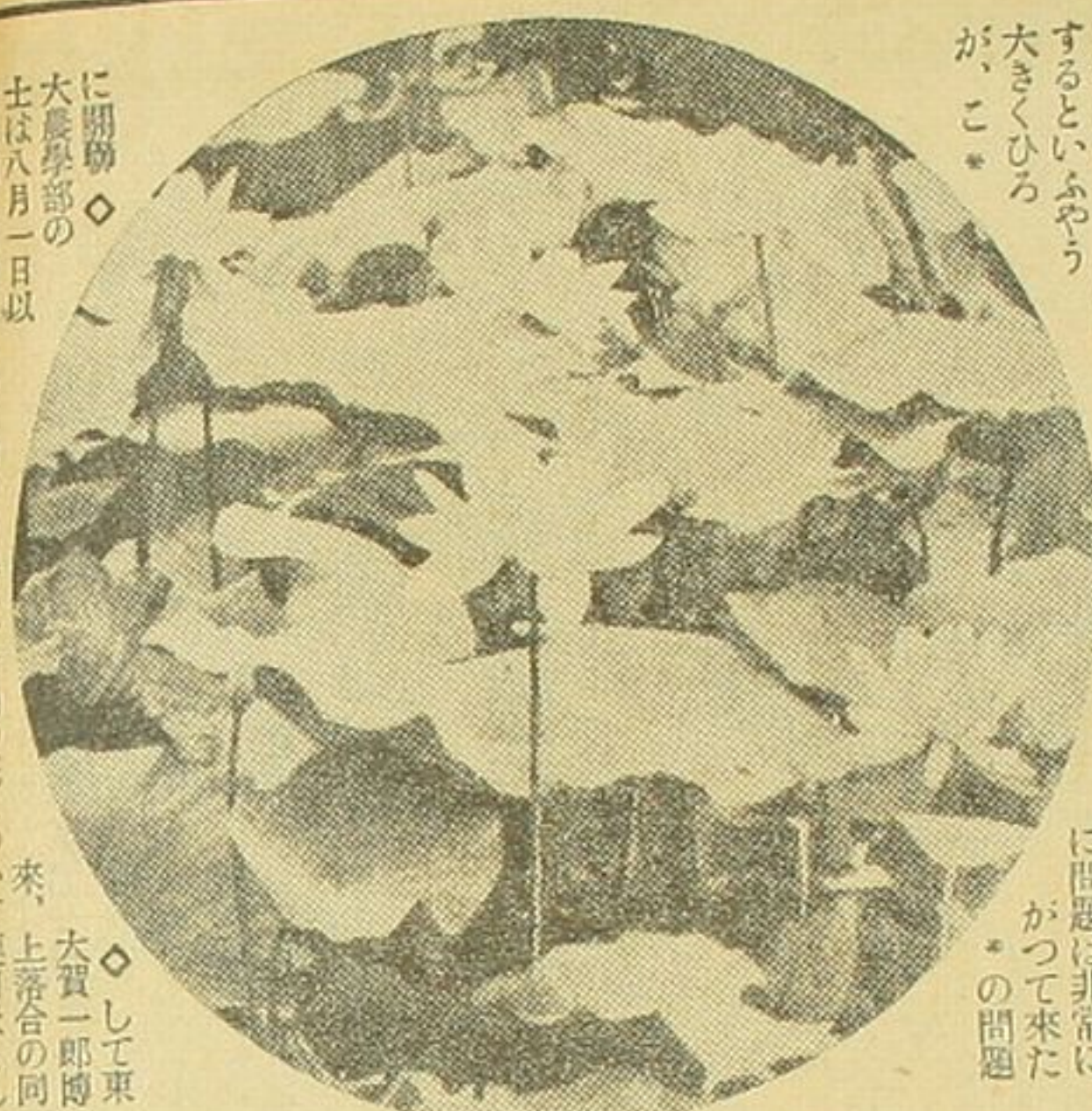
外國煙草輸入高表

蓮の花の開音は ガスの發散か

自邸の蓮三十余种について

大賀博士徹夜の研究

最近問題になつた蓮の花が開く時に音がするが、その音の論議は植物學界のみならず一般にも非常な興味を喚び起し、文部省の國定教科書までが側枝を食つて蓮の花の挿入の一部分に對し改訂をすることをいふやうに大ききひろが、こゝ



大賀博士の自邸に於て撮影した蓮の花の開音の観察の場

夜開いて朝閉ぢる

今までの諸説は大體夜の明け方に開花するといつてゐるが最初の開花は夜開いて朝閉ぢること、開花の期間は五日間であること等、このほか問題の有音、無音に對しても研究の結果新しい解釋を加へてゐる、同博士はつぎのやうに證する

五日の壽命

蓮の花は開花期間からいふと五日間が定法であることが分りました大體をいひますと第一日には午前四時に蕾が初めて少し開き午前六時に更に開いて午前八時には閉ぢ第二日は午前三時から四時の間に開き出し四時廿分になつて大きく開いてゐる、このときの開き方は

芝居
キノマ
レウユウ

この九月興行に松竹はかすかな朝への道を辿らうとする傾向を見せるやうになつた、といふのは東劇の全派の音羽屋一門がまた新人宇野信夫の創作戯曲の「鈍」の雨を演出するからである、「鈍」の方は創作座

移つて同日は夜中の十一二時に開き午前五時にはさらによく開いて翌日に持ち越し第四日はそのまゝの状態午後一時ごろに外側の花瓣がまづ落ち中心に近いあとのものは五日目になつて落ちます、このやうに開花期間は五日間ですがしかしこれは雨が影響してゐるからで降雨がなく暑いと四日間に短縮されます

花弁内へガスが充滿

太陽が當ると閉ぢますが、何故とちるのかこの理由は不明です、この説は今後引つゞいて研究したいと思つてゐます、それから問題の音ですが、自分のテーターからいふと開いたのではホンといふ音はするはずがありませんが、澤山の音をきいたといふ人の話をきくと、開いた十時とか三時にするといふのが多いので、この場合の音はガスの發散する際に生ずるものではないかと考へられます、元

研究で學位をとつた學者があまりませんが、これが葉のみならず花の中にも噴出し、それが花弁を閉ぢてゐるため外に洩れず何回もの噴出があつて花弁内に充滿し、いよいよとなつてこの壓力で花弁を押し開いて外に噴出する、その際にホンといふやうな形容詞で形容する音が發するのではなからうかといふ想像ですが、これはまた實驗を経てゐないので何ともいへませんが、この方の統計もこの際行ふつもりです

研究の結果で教科書も改訂

の芝田圖書局長は語る。大賀君から少し違つてゐるところがあるから改訂した方がよくはないかといふ話があつたので本當にひどく違つてゐるなら明年から改めるし、さう大したことなければつぎの改訂の時期をまつて改めるつもりですが、同氏から詳しい意見書が來ないので何ともいへませんが、たぶん教科書には花の咲いてゐる連根が大きく描いてあるが理科の方の話をきくと無いのが本當だといふのでさういつたことではないかと思はれます、花に開いてのことではなさうです



黒板

無理に日焼けし一日で水泡をつつたりしたから、水泡をつぶしオレオイル油を塗つておくとひどくなりません、糊でバサバサになつた葉はウエーブがむづかしいが、過熱したアイロンを當て勝ちですから御注意、むしろ自然のままにプランなどごとく、のへるのがいゝのです

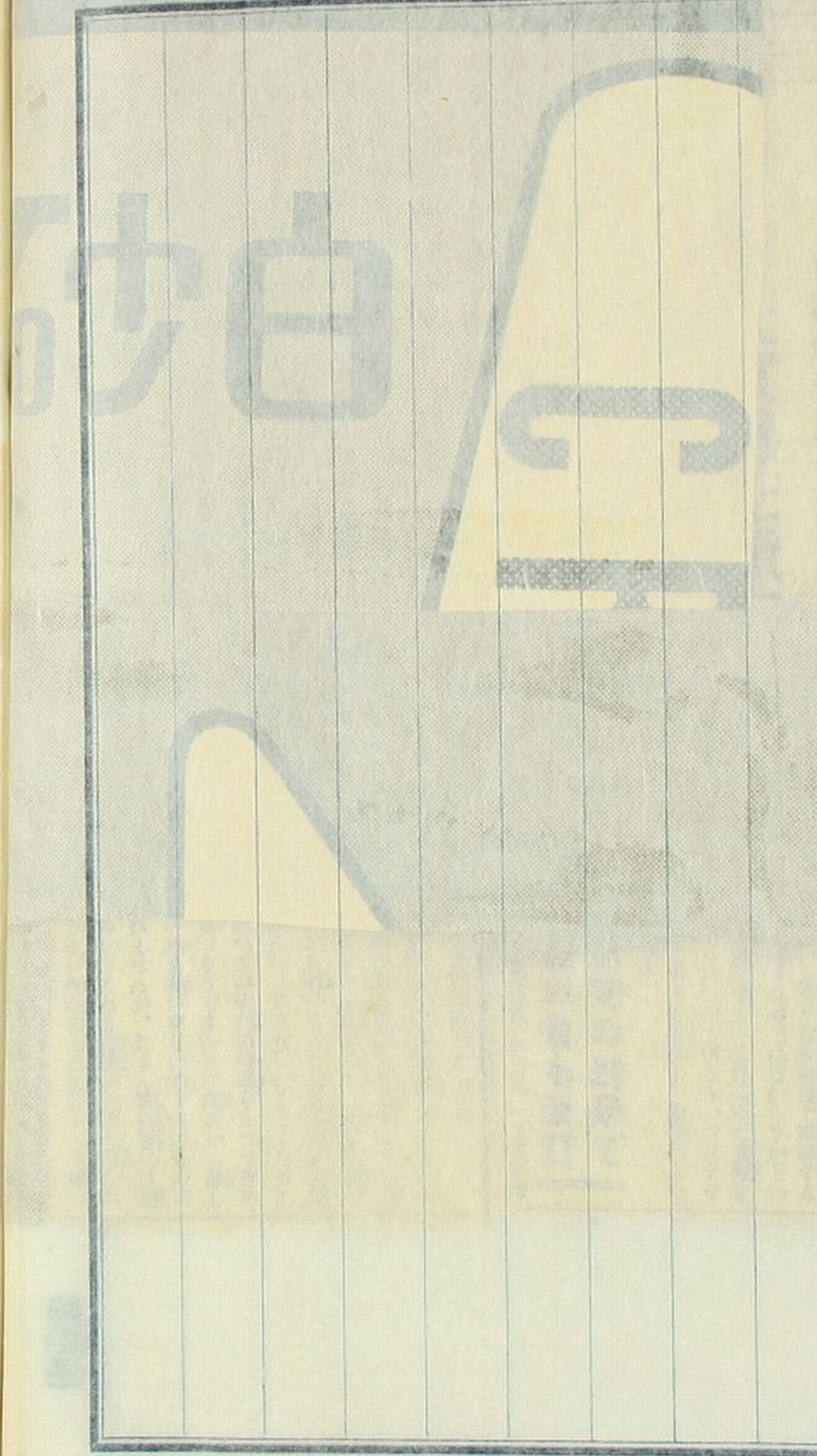
來蓮の葉からは太陽が照つて暑くなりますとガスを發散します、このときは水蒸氣と一緒に噴出する、これには立派な研究があつてこの





蓮の花の開音は

ガスの發散が



蓮の花の開音はガスの發散が...
この花の開音はガスの發散が...
ガスの發散が蓮の花の開音は...

のり被菰 (と樽空 塚空)

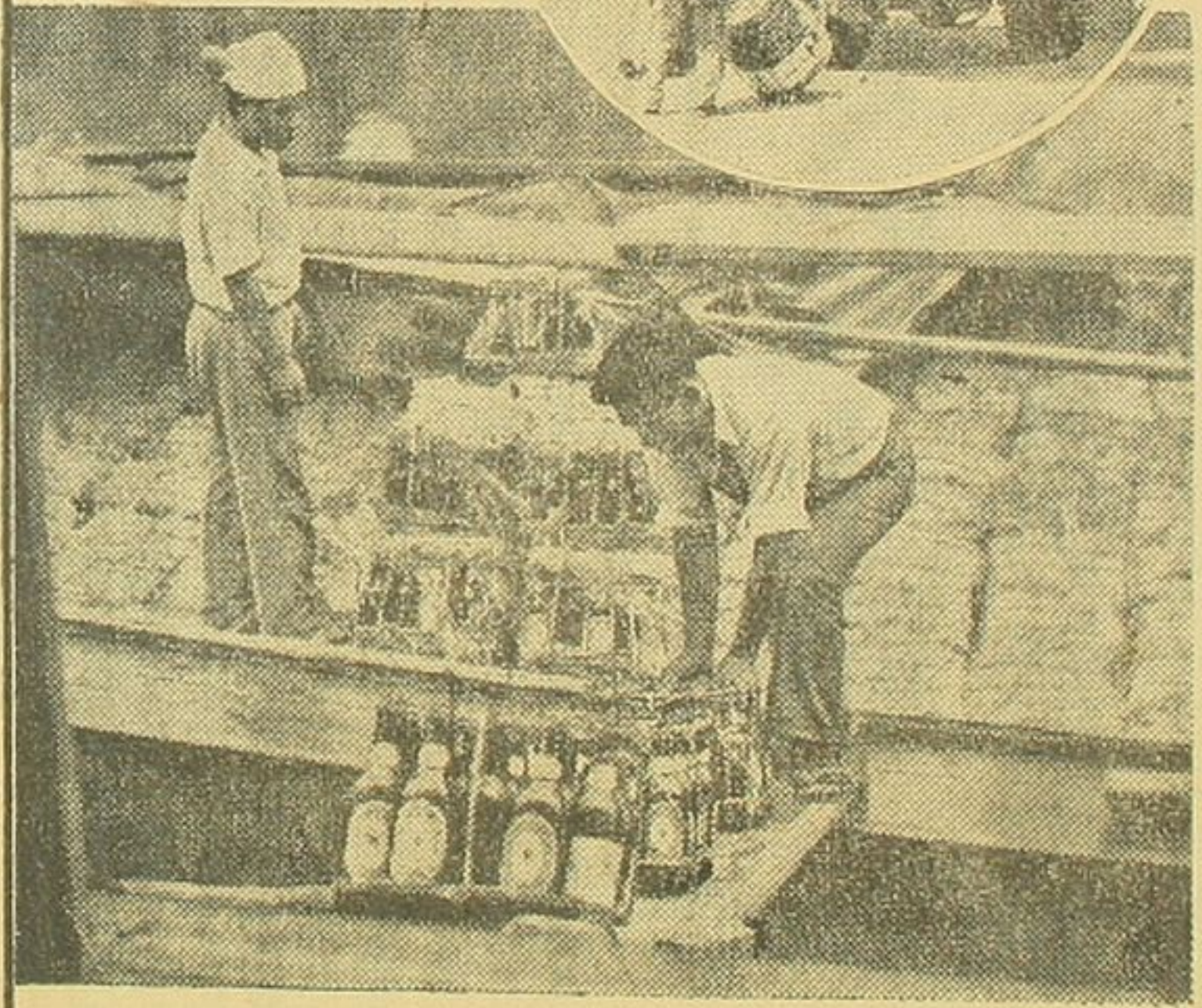
に囀の頭店は樽空

―ダイサきちんい・心要御―

あしも、人の子梅拾ひ、あれは江戸八百八町路次の風景だ、酒屋の小僧に投げられたこの感傷も小さい酒樽が一升瓶ともなれば、アツい氏の路次に流す切な際にかはつた、小さい酒樽はいつの間にか時代に流されたが四斗樽は依然として、健在、年四五百五十萬石の酒を呑吐してゐる。だから空樽商賣の親方は四斗樽だ、吉野杉かなんかの外白内赤の上物はあらで十圓以上だ、中物で五圓、下物なら三圓位であるにはある。

あらで十圓の四斗樽、この一空二度つかつた樽の空樽問屋の仕切値が二圓一圓五十錢、二空が一圓五十錢、三空だと一圓をきれる、一空はもう一度醸造元へ舞戻つて酒樽の二度のつとめた二空になると半數以上は酢樽、醤油樽に身賣りされる、三空と酢樽、醤油樽の空はおしなべて味醂樽になる、味醂樽は酒樽でありし頃下物扱ひにされた外赤内白の樽が赤くて景氣がよいのでむしろ高値に買はれる、酒樽問屋のつばは空樽にもあつた。

りた、菰被りの空樽はそのまゝ酒小賣人がをとり用として四つ五つに飾つたりする、商賣筋ではこの樽を製菓と呼ぶ、製菓樽は少々いんちだが、店に景氣がついて、愛嬌だ、とがむべからず、酒は何より氣分の景氣が他打らた菰被りも一空になると菰をはきの問屋筋の仕切値二錢五毛から一



も少ないし製造元への直接折返し運轉の一本道だから空樽商賣の算盤では問題にならない。

錢八厘五毛が相場、オラガは少々落ちる、問屋口錢は一個五毛だ、空樽商賣は毛單位だ、東京市場にみれば輸出用醤油樽として年三萬個内外、片脚油樽用(形の關係でキリンに限る)が年六、七十萬個位つき通にされるほかは全部それの製造會社へ逆行だ。

酒の一升樽は例へば月桂冠の問屋仕切値七錢五厘、櫻正宗、富久娘の六錢五厘が相場、月桂冠は瓶の色が特色があるから、櫻や娘等はレッテルがはけると減元で引きとらぬ、二合の樽は元はひとりで賣元はひとりで、白酒用や花見樽で櫻の土手に轉がるのが落ちた、醤油の三印(キッコマン)、ヤマシヒゲタの空樽は問屋仕切値七錢七厘五厘、これら樽に浮き出し文字がないもの(舊型)はレッテルがないと文なしだ。

空樽酒はその生産場所が大體一定してゐる關係で空樽商賣の筋道は單調な商賣で片づけられるのが多い、空樽商賣に至つてはくもの纏つた、まづ登場人物の重頭につくづい氏、市内各所に散在する仕切屋が年と一日運轉安全十圓くらゐをかして、買ひ出し人を市中中に放つ手もある、仕切屋から中間屋へ、中間屋から會社指定の問屋へ、原毛の利を添うて流れて行くこの項終り。

ビール、酒、醤油の空樽には殆ど相場の變動がない、變動があるのはサイダー場だ、といふのは一流サイダー(金線三矢等)の空樽に二流品をつめて賣る筋があるからだ、で二流側は空樽の値を吊りあげて出廻り作戦からだ、この場利用は問題になつたが結局商法違反でないことになつてゐる、高低の値開きは一錢位、數でこす商賣で一個三錢四厘がそろゝ、退陣の季節にこの雨だ、二錢三厘に落ちた。

空樽酒はその生産場所が大體一定してゐる關係で空樽商賣の筋道は單調な商賣で片づけられるのが多い、空樽商賣に至つてはくもの纏つた、まづ登場人物の重頭につくづい氏、市内各所に散在する仕切屋が年と一日運轉安全十圓くらゐをかして、買ひ出し人を市中中に放つ手もある、仕切屋から中間屋へ、中間屋から會社指定の問屋へ、原毛の利を添うて流れて行くこの項終り。

商品 一代記

倫出産大 葉賦人 趙之謙



趙之謙 其の三

河井茶庵氏藏

紙本

丈 六 尺

幅 一尺五寸五分

趙之謙の繪は、勁き、厚み、重さ、大いさなどの點に於て觀るべき藝術である。紙面一杯に擴充された形式は、月並な型を破つて確かに男性的な力強い伸展性を示してゐる。この力は、構圖にも運筆にも着色にも及んでゐる。初期の作は聊か写描で、緊密の度に缺けてゐる憾みもあつたが、家諫の意を帯びるに従つて、その創造力は深く意識附けられ、底光りのするものに統一せられてゐる。此の同蓮葉も柳葉も、中墨淡墨淡墨淡線などによつて諧調を保ち、細部に拘泥せぬ大胆な没骨描は、壯重な葉脈の描線などに因つて引き締められてゐる。

